

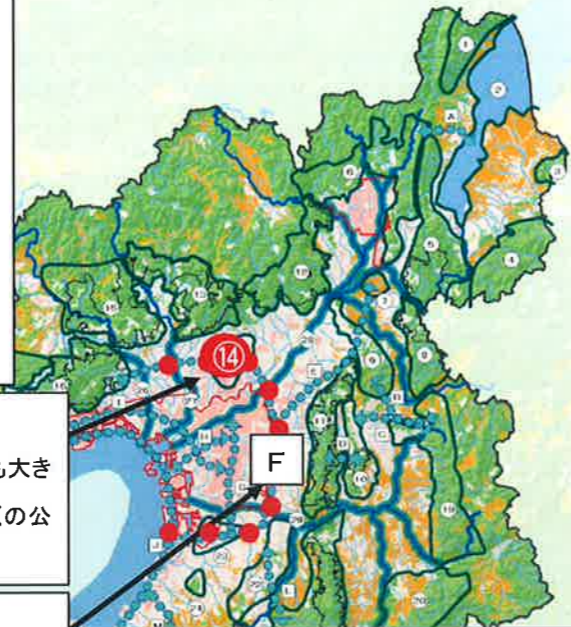
万博記念公園における今後の緑の方向性 (第3回 緑整備部会資料)

1. 「近畿圏の都市環境インフラのグランドデザイン」における位置づけ（国）

○水と緑のネットワーク形成（近畿圏の自然環境の骨格構造）

<「保全等を検討すべき地域」>

1. 多様な機能を有するまとまりのある自然環境
2. 近畿圏の特徴である歴史的資源と自然環境が一体となっている地域
3. 21世紀型の視点として市民等の利用ニーズや活動のある地域
4. 水と緑のネットワークの骨格となる以下の地域
 - ・都市の周辺部に位置し、市街地を取り巻くまとまりのある樹林地
 - ・都市の周辺部に位置し、水田、樹林地、水辺などの混在する地域
 - ・都市近郊に残存する、または分断されつつある樹林地や草地環境
 - ・都市部を流れる主な河川や沿岸域に残存する干潟等の水辺環境



⑭北大阪丘陵地

大阪北部の豊中・吹田・茨木・箕面にまたがるなだらかな丘陵地域。…最も大きな緑地のまとまりとして万博記念公園が存在するほか、服部緑地など数多くの公園が点在しており、快適な生活環境の提供の一助となっている。

F 都市を環状につなぐ軸

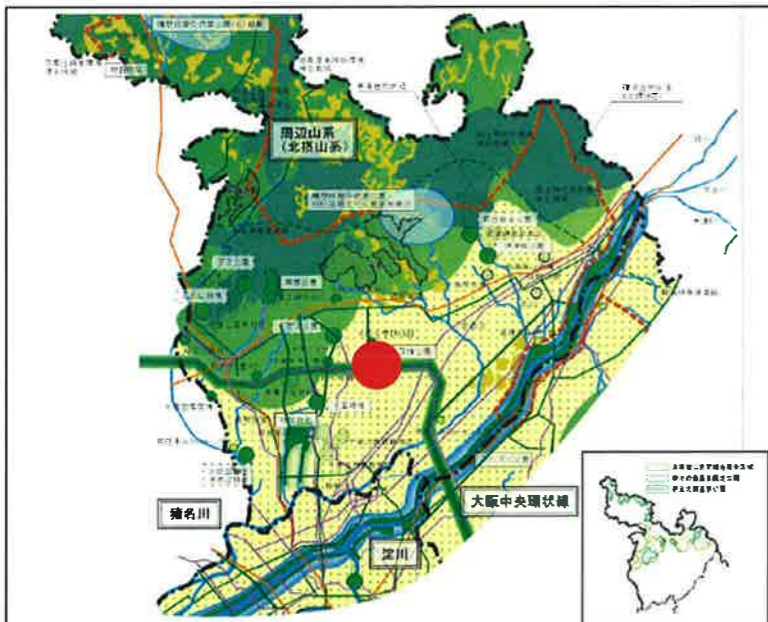
…この沿線は緑のまとまりに極めて乏しい一体であり、特に自然とのふれあいや景観形成の観点から自然環境のまとまりが必要な地域である。…沿線における公園緑地を初めとする緑の創出を行いグリーンベルトの形成を目指す。…

広域地方計画への反映

…近畿ブロックの広域地方計画協議会に対して本グランドデザインの活用を働きかける…

2. 「みどりの大阪推進計画」の位置づけ（大阪府）

○既存の大規模公園を北大阪地域の「海と山をつなぐみどりの風の軸」形成における「骨格となるみどり」として保全



3. 吹田市第2次みどりの基本計画における位置づけ（吹田市）

- 大規模な公園をみどりの「拠点」と位置づけ
- 公共のみどりを保全し次世代に継承

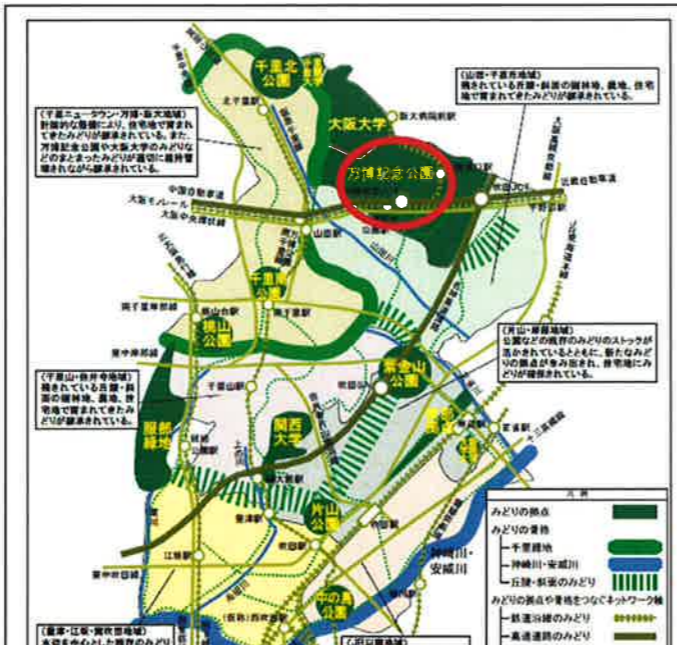


図 3.2.1 みどりの将来像

3. 各計画に記載される万博記念公園の緑の姿

◆近畿圏の都市環境インフラのグランドデザイン（H18.08）－都市再生法－

第5章：都市環境インフラの将来像の実現に向けた行動方針（都市周辺地域）

…都市周辺地域では、残存する自然環境を保全するとともに、既成都市地域と同様に様々な場所で再生・創出を進め、人と自然がふれあい、安全で快適な都市環境の形成に重点を置いた各種の取組を進める。また、大部分を占めている民有地の緑化の推進により緑豊かなまちづくりを進め、既成都市区域と周辺地域を結ぶネットワーク機能の強化を図る。

◆近畿圏広域地方計画（H21.08）－国土形成計画法－

第3節：目指す姿を実現するための戦略

（健全な流域圏と生態系の管理・再生）

…生物多様性の確保に重要な役割を果たす優れた自然環境を保全・再生するため、過去に損なわれた生態系の回復を図るとともに、希少野生生物の保護管理、里地里山等の二次的自然環境や市街地等に残された自然環境の保全、郷土種を保全するための外来種の防除等生育に必要な環境整備を適切に行う。

（自然との共生の推進）

…都市圏においては、近郊緑地保全区域等の指定拡大を図るとともに、都市公園の整備、屋上・壁面や公共空間等の緑化、都市内農地の保全等による都市の緑の整備、親水性の向上、運河の再生やため池の保全を推進する。

第4節：主要プロジェクト

（「緑のヒンターランド」の保全と都市のみどりの創出）

…京阪神都市圏において、生物の移動経路の連続性やまとまりのある緑地が確保され、生物多様性の確保に寄与する都市の緑を創生するため、「近畿圏の都市環境インフラの将来像」等を踏まえ、大規模緑地の整備、大阪中央環状線「中環の森」等の沿道空間の緑化、屋上・壁面や校庭の緑化等により計画的な緑化を推進するとともに、進捗状況の点検を行う。

◆みどりの大阪推進計画（H21.12）－都市緑地法－

第2章：みどりの大阪実現戦略（基本戦略2 みどりの風を感じるネットワークの形成）

…主要道路・主要河川・大規模公園緑地を軸や拠点として、環状・放射状・東西方向などの、みどりの連続性や厚みと広がり確保し、周辺山系や大阪湾の豊かな自然を街へと導く「みどりのネットワーク」を形成します。

◆吹田市第2次みどりの基本計画（H23.03）－都市緑地法－

第5章：みどりのまちづくりの方針（千里ニュータウン・万博・阪大地域）

…関係機関に働きかけ、万博記念公園の将来にわたる一体的保全・存続を図ります。

◆吹田市都市計画による都市計画公園の決定－都市計画法－

公園種別：広域公園 名称：9・6・205-1 万博公園 計画決定告示年月日(当初)S42.11.06 建告 308号 (最新)H16.12.28 府告 2404号
都市計画決定面積：129ha(外周道路内) 事業認可 S43.03.28 建告 236号 129ha 開設面積 0.0ha

4. 各計画より求められる万博記念公園の緑の姿

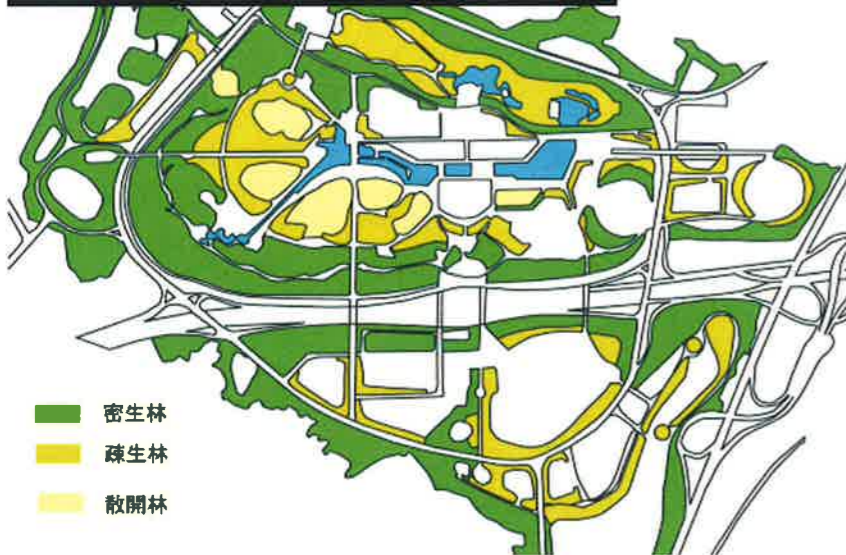
- ① 都市環境インフラのグランドデザイン・近畿圏広域地方計画
「自然環境の保全」「人と自然のふれあい」「安全で快適な都市環境形成」「ネットワーク機能強化」
- ② みどりの大阪推進計画
「緑のネットワークの拠点」「緑の連続性や厚みと広がり確保」
- ③ 吹田市みどりの基本計画
「万博記念公園の将来にわたる一体的保全・存続」

- ① 近畿圏を俯瞰し設定された、「水と緑のネットワーク」の重要な「緑の拠点」
- ② 都市圏の重要な「人と自然のふれあいの場」

1. 緑に対する社会的要請

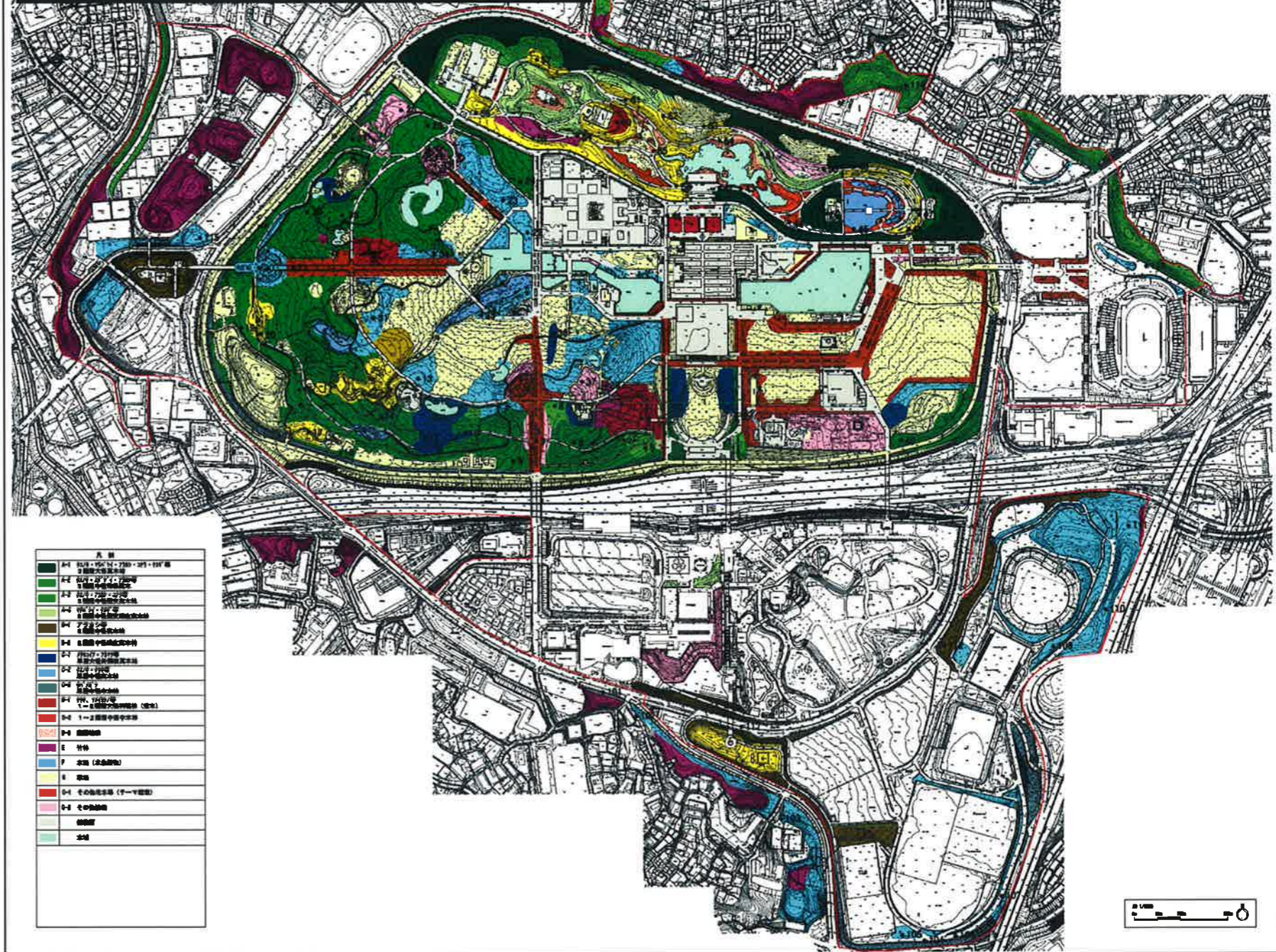
- 過去の「万博記念公園将来ビジョン (H18.07)」の方針
「生物多様性」「CEPA※」「イベント・国際交流」
(※CEPA: 生物多様性推進のための広報・教育・普及啓発活動)
- 各種計画の位置づけ
「水と緑のネットワークの拠点」「人と自然のふれあいの場」
- 社会ニーズからの要請
「共助社会」「ライフスタイルの変化」「観光」「文化・スポーツ」

2. 万博記念公園の緑の現況図



公園外周部からシイ、カシ等の常緑広葉樹中心の閉鎖的である樹林の密生林、真ん中には落葉広葉樹を中心とした比較的明るい樹林である疎生林、中央部には休養や軽い運動などの利用されることを想定した芝生中心とした明るい空間である散開林が配置されている。

4. 万博記念公園の現況植生図



3. 万博記念公園の「みどり」の課題

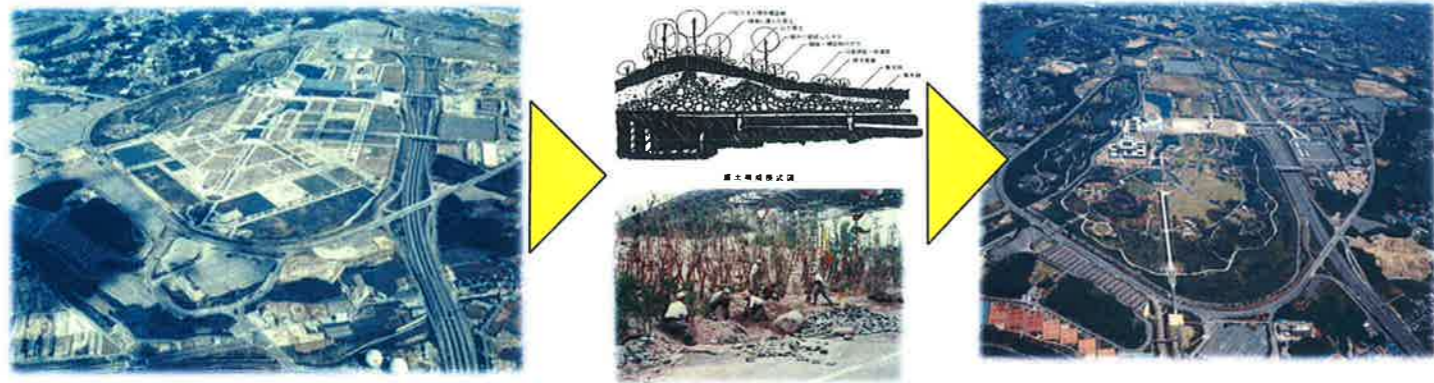
- | | | | | | |
|---|---|--|---|---|---|
| <p>①森</p> <ul style="list-style-type: none"> ・過密林化、樹種の単純化が進み、階層構造も未形成 ・人の利用頻度が少ない | <p>②シンボルゾーン</p> <ul style="list-style-type: none"> ・公園の顔として相応しい空間 ・樹木の繁茂など景観阻害要因 ・段差、線形など歩きにくい動線 ・太陽の塔を魅せる景観デザインが必要 | <p>③日本庭園</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大径化・繁茂する樹木の適切な密度管理・景観管理 ・高度な品質の維持承継 ・入場者数の低迷 ・海外を含めた観光拠点化 | <p>④水(水系)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生き物を豊かにするための水系の役割を維持 ・楽しめる水辺の整備 | <p>⑤交流と創造</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多様な主体※が利用者にプログラムを提供する公園とする ・プログラム提供拠点の整備 ・多様な主体の活動を支援する組織・機能の整備 <p>※ボランティア、企業、NPO、マスコミなど</p> | <p>⑥外周緑地</p> <ul style="list-style-type: none"> ・予算不足による管理水準に伴い、竹林拡大、ニセアカシア等の繁茂 ・隣接民有地からの苦情増加 ・作業道が無く、管理作業にかかるコストが高い ・事業者誘致と連動した緑地管理の仕組みづくり |
|---|---|--|---|---|---|

1. 万博記念公園の森づくりの背景

- 「人類の進歩と調和」から「人と自然の共生」へ ⇒ ◆整備理念：「緑に包まれた文化公園」
⇒①国際性を持った新しい国民的財産 ②自然環境の復活と維持 ③人と自然の調和
- 「人と自然の共生」を念頭に置き整備された先駆的な公園

2. 森づくりのこれまでの取り組み

- ◆「自立した森」を2000年に造成することを目標とした、3期の長期的プログラムが提示
⇒①創生期（1972～1983）、②育成期（1984～1999）、③熟成期（2000～）
- ◆土地造成⇒緩やかな「すり鉢状地」に約295種、約100万本の多様な樹種を3タイプで植栽
⇒密生林（常緑樹中心で閉鎖的）、疎生林（落葉樹中心で四季の変化）、散開林（芝生空間と緑陰）



- ◆当初2000年完成の「自立した森」の計画は、量的には実現したが質的には未完成
⇒①過密林化 ②樹種の単純化 ③階層構造が未形成 ④動植物種に乏しい ⑤種の侵入が困難
- 2006年から「自立した森」の再生がスタート（生物多様性を目指した森づくり）
⇒今後の森づくり手法を検討するため、万博機構内に「自立した森再生研究委員会」を設置
⇒「自立した森づくり」計画の策定（平成35年度まで計画策定済み、生物多様性の10年行動計画）
⇒毎木調査による本数、材積等の調査（順応的管理のためのデータ集積）

3. これまでの取り組みによる成果

- 多くの希少種が生息（オオタカの営巣等）
- 「緑に包まれた文化公園」における象徴としての「緑」
- 都市周辺における巨大なCO2吸収源
- 都市周辺におけるクールアイランド
- 人工地盤で森を再生した日本初の事例、
- 安心・安全な人と自然とのふれあいの場

4. 万博記念公園の「緑」がもつポテンシャル

- ① 憩い、安らぎ（憩い）
人々が安心して快適に利用・憩うことのできる四季を体感する緑。
- ② 舞台として（舞台）
文化やスポーツの行催事の舞台として活用される緑。
- ③ 感動を与える（感動）
美しい日本庭園や四季の花による、来園者が感動する緑。
- ④ 学び・自然環境学習（学習）
自然再生の過程を理解し、人と自然のふれあいについて考えることができる緑。
- ⑤ 芸術文化の発信（文化）
新たな文化・芸術を生み出す活動につながる緑。
- ⑥ 国内・海外の人々との交流（交流）
国内外の人々が「日本」を体験できる緑。
- ⑦ 新たなライフスタイル（ライフ）
LOHAS等、自然と調和するライフスタイルを提案できる緑。
- ⑧ 癒し・健康づくり（健康）
ルディックウォークやスロウォーキング、ヨガ等、心と体の健康を育む緑。
- ⑨ 資源循環形成（循環）
循環型社会、低炭素社会、自然共生社会を実現する緑。

5. 将来ビジョンにおける緑づくりの方向性（案）

- 水と緑のネットワークの拠点機能の強化
- 人と自然とのふれあいの場の形成
- 文化・スポーツを通じた交流の促進
- 共助社会の促進

対応策

緑づくりの方向性

- ① 50年の緑づくりの資産を継承
- ② 人・自然・文化の関わりを通じて、新たな交流と創造を生み出す緑

6. 目指すべき「緑」の姿（案）

- ◆人と自然・文化・人の交流を通じて様々な創造が生まれる「緑」（いのちを育む森）
- ① 人と自然がふれあう緑
⇒生き物が豊かで生態系が安定した緑など
- ② 人と文化がふれあう緑
⇒多くの人の関わりで育成され、多くの人が楽しむ場となる緑など
- ③ 人と人がふれあう緑
⇒NPO、地域関係団体との連携により幼児から高齢者が親しむ緑など

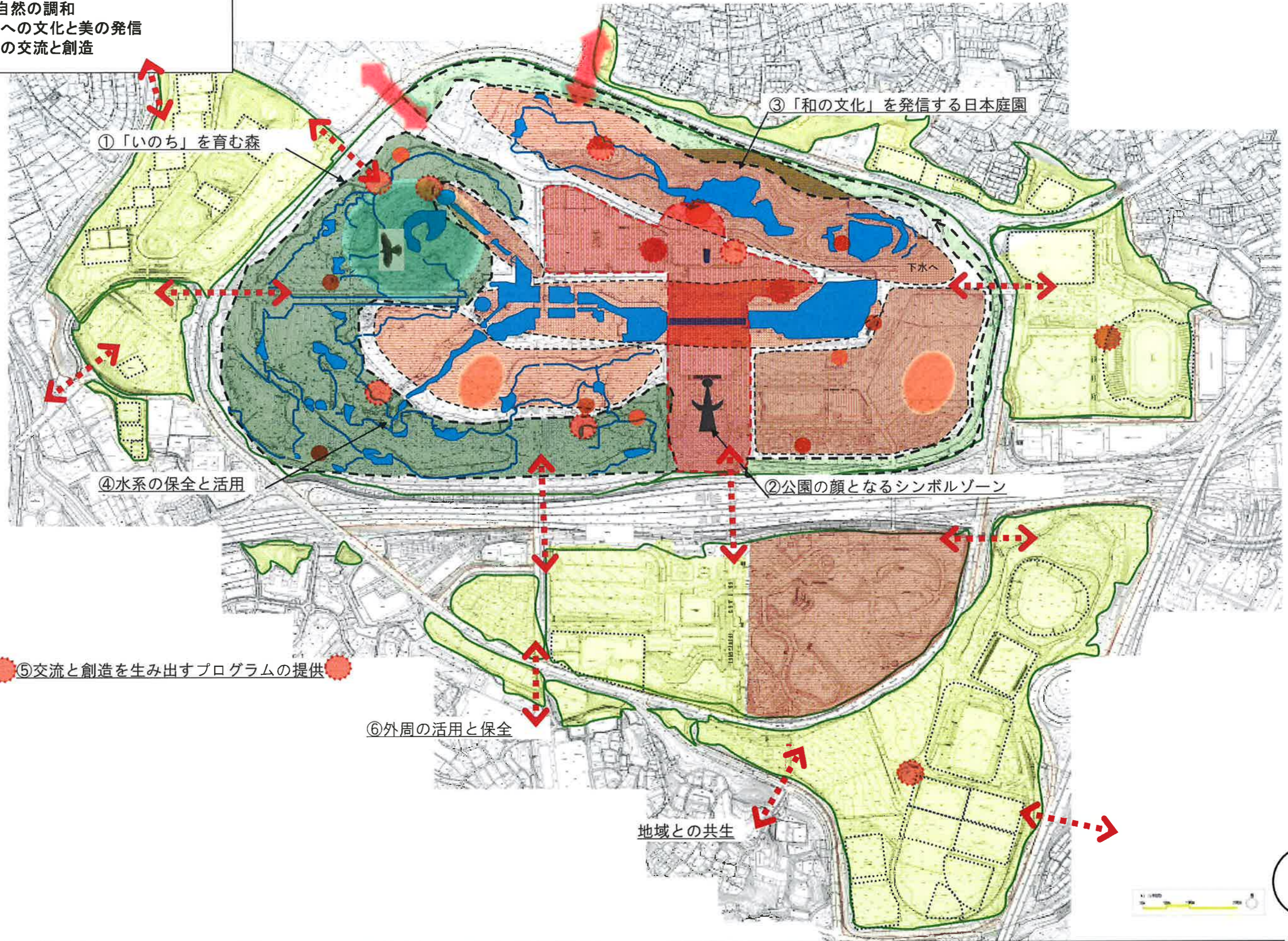


これからの取り組み

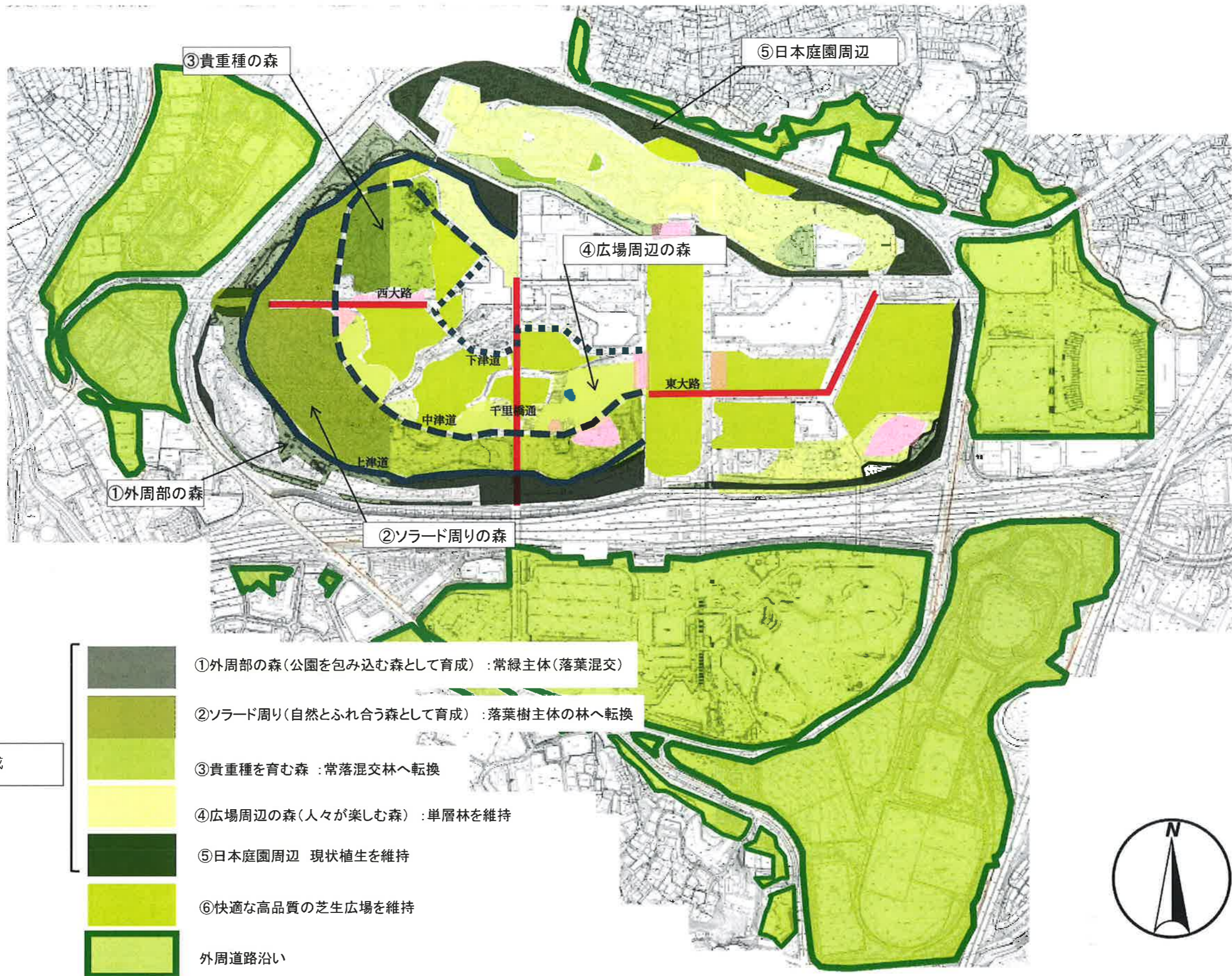
- ① 公園の骨格となる緑を維持継承していく（特に「いのちを育む森」）
- ② 広大な広場であるシンボルゾーンから文化を発信する
- ③ 日本の文化を体感、感動を生む日本庭園
- ④ 水系の保全と活用
- ⑤ 「交流と創造」の拠点を整備する
- ⑥ 外周部の緑の活用と保全

これからの万博記念公園（案）

基本理念 「人類の進歩と調和」
目標像 人と自然の調和
世界への文化と美の発信
人々の交流と創造



森の育成（案）



いのちを育む森の育成

- ①外周部の森(公園を包み込む森として育成) : 常緑主体(落葉混交)
- ②ソラード周り(自然とふれ合う森として育成) : 落葉樹主体の林へ転換
- ③貴重種を育む森 : 常落混交林へ転換
- ④広場周辺の森(人々が楽しむ森) : 単層林を維持
- ⑤日本庭園周辺 現状植生を維持
- ⑥快適な高品質の芝生広場を維持
- 外周道路沿い
- 花の見所



森の育成(案)

⑤-2

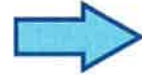
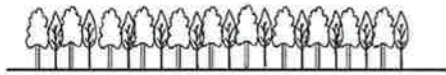
博覧会跡地の人工地盤に育成してきた森を過密林化に対応しつつ「いのちを育む森」として育成する。

※以下の①～④の区域間には移項帯が存在。

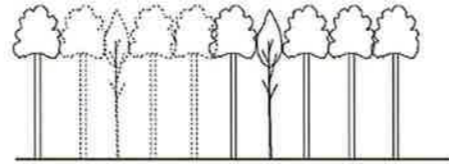
	密生林			疎生林		
	①外周部の森 (6.1ha) (公園を包み込む森として、人のつくった 平地の照葉樹林として育成)	②ソラードの周りの森(10.4ha) (多くの人々が自然とふれあう森として育成)	③貴重種の森 (2.7ha) (貴重な生き物を育む森として育成)	④人々が楽しむ森 (人々の楽しみの場)		
	常緑主体を維持	落葉樹主体の森へ転換	常落混交林への転換	単層林を維持		
課題	<ul style="list-style-type: none"> 過密林化 (約 900 本/ha) 樹種の単純化 (アラカシ、クスノキ、ウバメガシの 3 種で約 60%) 階層構造未形成 	<ul style="list-style-type: none"> 過密林化 (約 750 本/ha) 樹種の単純化 (アラカシ、クスノキで 2 種約 40%) 階層構造未形成 	<ul style="list-style-type: none"> 他の区域と同様常緑樹の暗い森となっている。 オオタカの営巣地となっているため急激な間伐等はできない。 	<ul style="list-style-type: none"> 踏圧による高木層の樹勢衰退及び低木層の消失。 		
目標像	<ul style="list-style-type: none"> この地域の潜在植生である照葉樹林 (100 年生で 100～200 本/ha) を目指す。 間伐により、林床に光を入れ、階層構造の整った安定した樹林とする。 現在優占しているアラカシを中心に間伐を行い、シイ林、カシ林、タブ林など多様な樹種が生育する環境とする。 常緑樹の比率は現在と同様の 80%程度を想定。 <p>目標種： 高木：シイ、カシ、タブ等 低木：ヤブツバキ、ヒサカキ、ヤツデ等 下草：ヤブラン、ヤブコウジ、マンリョウ等</p>	<ul style="list-style-type: none"> 常緑樹中心の林相から落葉樹中心へ転換する。 低木層や亜高木層の植被率を低く抑え、見通しを確保し、散策や観察等の林内活動を行える樹林と階層構造が整い、生物多様性に富んだ樹林をモザイク状に配置。 <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; padding: 5px;"> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; margin: 0;">林内活動できる樹林</p> <ul style="list-style-type: none"> 密度：大径木 25～100 本/ha 林床の草本相形成に力点を置く。 常緑樹の比率は、現在の 71% から 20%程度へ落とす。 <p>目標種： 高木：クヌギ、コナラ、ヤマザクラ等 低木：ツツジ類 下草：キツネノカミソリ等</p> </td> <td style="width: 50%; padding: 5px;"> <p style="text-align: center; border: 1px solid black; margin: 0;">生物多様性に富んだ樹林</p> <ul style="list-style-type: none"> 密度：大径木約 100 本/ha 常緑樹の比率は、現在の 71% から 20%程度へ落とす。 <p>目標種： 高木：クヌギ、コナラ、ニレ類、ヤマザクラ等 低木：ガマズミ、ツツジ類 下草：キンラン、ヤブラン等</p> </td> </tr> </table>	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; margin: 0;">林内活動できる樹林</p> <ul style="list-style-type: none"> 密度：大径木 25～100 本/ha 林床の草本相形成に力点を置く。 常緑樹の比率は、現在の 71% から 20%程度へ落とす。 <p>目標種： 高木：クヌギ、コナラ、ヤマザクラ等 低木：ツツジ類 下草：キツネノカミソリ等</p>	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; margin: 0;">生物多様性に富んだ樹林</p> <ul style="list-style-type: none"> 密度：大径木約 100 本/ha 常緑樹の比率は、現在の 71% から 20%程度へ落とす。 <p>目標種： 高木：クヌギ、コナラ、ニレ類、ヤマザクラ等 低木：ガマズミ、ツツジ類 下草：キンラン、ヤブラン等</p>	<ul style="list-style-type: none"> 現在の常緑樹中心の林相から常落混交林への転換をめざす。 階層構造の整った生物多様性に富んだ樹林を目指す。 密度に関しては大径木約 100 本/ha を目標とする。 常緑樹の比率は 50%程度 <p>目標種： 高木：シイ、カシ、タブノキ、アキニレ、エノキ、コナラ等 低木：ガマズミ、ナンテン等</p>	<ul style="list-style-type: none"> 現状の単層林を維持し、林相や樹種の変更をしない。 <p>目標種 梅林、茶畑周辺：クヌギ・コナラ林 どんぐり池周辺：クヌギ・コナラ林 桜の流れ周辺：ヤマザクラ林 等</p>
<p style="text-align: center; border: 1px solid black; margin: 0;">林内活動できる樹林</p> <ul style="list-style-type: none"> 密度：大径木 25～100 本/ha 林床の草本相形成に力点を置く。 常緑樹の比率は、現在の 71% から 20%程度へ落とす。 <p>目標種： 高木：クヌギ、コナラ、ヤマザクラ等 低木：ツツジ類 下草：キツネノカミソリ等</p>	<p style="text-align: center; border: 1px solid black; margin: 0;">生物多様性に富んだ樹林</p> <ul style="list-style-type: none"> 密度：大径木約 100 本/ha 常緑樹の比率は、現在の 71% から 20%程度へ落とす。 <p>目標種： 高木：クヌギ、コナラ、ニレ類、ヤマザクラ等 低木：ガマズミ、ツツジ類 下草：キンラン、ヤブラン等</p>					
管理内容	間伐費用、 枯れ枝の撤去 (園路沿いのみ)	間伐及び草刈り、枯れ枝撤去等、ツルの刈り取り、低木の整理、散策路整備及び管理費用、苗木植栽	間伐及び草刈り、枯れ枝の撤去、ツルの刈り取り、低木の整理、散策路整備及び管理費用	必要に応じて草刈り、枯れ枝の撤去、低木の整理、剪定		
対応手段	万博記念公園運営審議会における審議 (森林生態学などの専門知識を有する委員)					
	<ul style="list-style-type: none"> 万博記念機構作成の「自立した森再生計画の第二世代の森づくり」を継承し、計画を部分修正するかたちで、大阪府の実施計画を作成 間伐、ギャップ工法、萌芽更新などの手法を組み合わせながら、林内の光環境改善し、階層構造のある樹林へ導く。 	<ul style="list-style-type: none"> 実施計画の作成。 現在優占しているアラカシなどの常緑広葉樹を選択的に伐採し、残存の落葉樹をいかながら、クヌギ、コナラを中心とした落葉広葉樹を植栽し、樹種転換を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> 他の区域に比べ低木層が多く残っており、これらの育成を目的とした、間伐を行う。(光環境改善) ②と同様の実施計画を作成するが、オオタカの営巣に配慮して、間伐場所や時期を設定したり、柔軟に変更できるような計画とする。 残存のアキニレ、エノキ、コナラなどを残し、本数の多い、アラカシ、シイ、タブの本数を減らす。 	<ul style="list-style-type: none"> チップ撒き均しによる踏圧抑制 エアレーション 高層木の樹勢回復 萌芽更新 		
年次計画 短・中期 (～2020)	<ul style="list-style-type: none"> 実施計画策定 毎木調査による現況把握 間伐による密度管理 (開口率は全体面積の 4%) ※現在は約 2% 	<ul style="list-style-type: none"> 実施計画策定 ギャップ造成により、林相を転換 (全体面積の 10%) ※現在は約 5% 	<ul style="list-style-type: none"> 実施計画の策定 間伐による密度管理 (全体面積の 10%) ※現在は約 5% 	<ul style="list-style-type: none"> 通常の緑地管理業務として対応 必要に応じて樹勢回復工事、チップ撒き均し 		
長期 (～2030)	<ul style="list-style-type: none"> 毎木調査による現況把握 間伐による密度管理 (開口率は全体面積の 8%) 森づくり調査による管理手法の更新 	<ul style="list-style-type: none"> 毎木調査による現況把握 ギャップ造成により、林相を転換 (全体面積の 20%) 森づくり調査による管理手法の更新 	<ul style="list-style-type: none"> 毎木調査による現況把握 間伐による密度管理 (全体面積の 20%) 森づくり調査による管理手法の更新 	<ul style="list-style-type: none"> 毎木調査による現況把握 森づくり調査による管理手法の更新 		
超長期 (～2070)	<ul style="list-style-type: none"> 間伐による密度管理 (開口率は全体面積の 10%) 目標林相形成。 	<ul style="list-style-type: none"> ギャップ造成により、林相を転換 (全体面積の 100%) 新たな管理計画の策定 	<ul style="list-style-type: none"> 間伐による密度管理 (全体面積の 100%) 新たな管理計画の策定 	<ul style="list-style-type: none"> 通常管理継続 		
備考	落葉樹主体の森への転換、常落混交林への転換は、長期 (～2070) 終了後、新たな管理計画の策定が必要である。					

①密生林(外周林)
(常緑主体を維持)

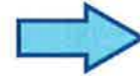
植栽時



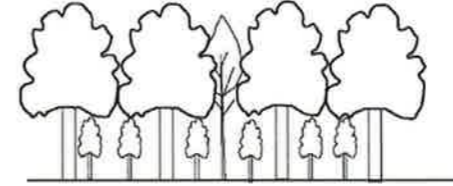
現在(密度約900本/ha, 常緑樹80%)



ギャップ造成

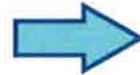
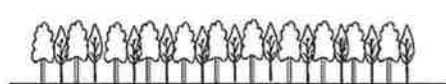


目標像 植栽から100年
(密度100~200本/ha, 常緑樹80%)

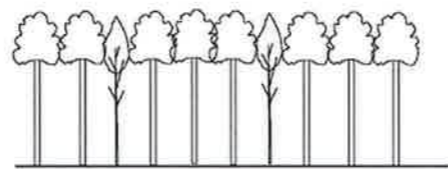


②密生林
(落葉樹主体の森へ転換)

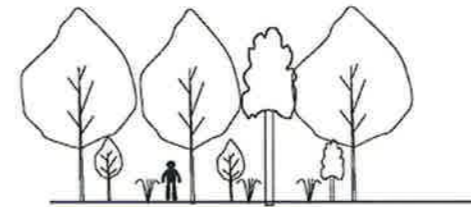
植栽時



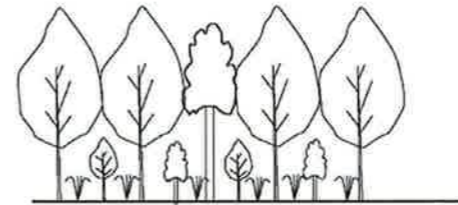
現在(密度約750本/ha, 常緑樹71%)



目標像(林内を散策できる森) 植栽から100年
(密度25~100本/ha, 常緑樹20%程度)



目標像(生物多様性に富んだ森) 植栽から100年
(密度100本/ha, 常緑樹20%程度)

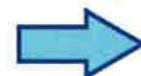
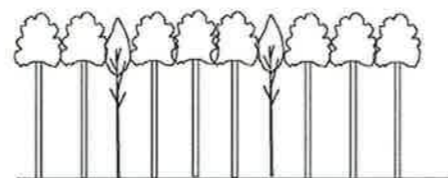


③密生林(水鳥の池周辺林)
(常落混交林への転換)

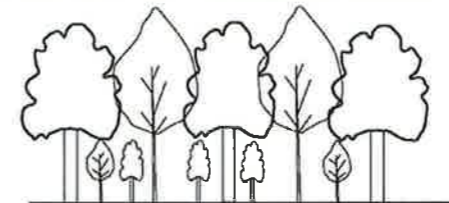
植栽時



現在(密度約650本/ha, 常緑樹77%)



目標像 植栽から100年
(密度100本/ha, 常緑樹約50%)



凡例



常緑樹



落葉樹

1. シンボルゾーンに求められるデザイン

- 公園のシンボルである太陽の塔を緑の海のなかで人々に魅せる空間
- 公園の顔として、観光客を呼び込める魅力をもった空間
- 中央口から日本庭園までを一体的・効率的に、円滑に移動できる機能

【エントランス（中央口～太陽の広場～太陽の塔周辺）】

- ・太陽の塔と周辺の緑が融合したシンボリックな景観を眺め、訪れた人に感動と強烈な印象を与える空間として演出
- ・初めて訪れた人や観光客にもやさしい公園施設の案内機能の充実

【交流エリア（お祭り広場～日本庭園前駐車場・ゲート～バラ園）】

- ・公園が持つ文化や公園から生まれる文化を発信する機能
- ・多彩な行催事を行い、人々の交流と創造を生む機能
- ・民族学博物館や大阪日本民芸館、日本庭園の連携を円滑にする機能

【日本庭園（正門、中央休憩所）】

- ・食、庭園景観、伝統文化など、和の文化と美を体感できる機能

2. 課題

【構造】

- ①ゾーンの中央に駐車場があり、中央口から日本庭園までの連続した景観の形成が図れない。
- ②縦断に高低差があり、平面的な空間形成が難しく、勾配のきつい園路もある。
- ③水辺を楽しむ場所が無い（大地の池と園路が生垣で遮断）。



【動線】

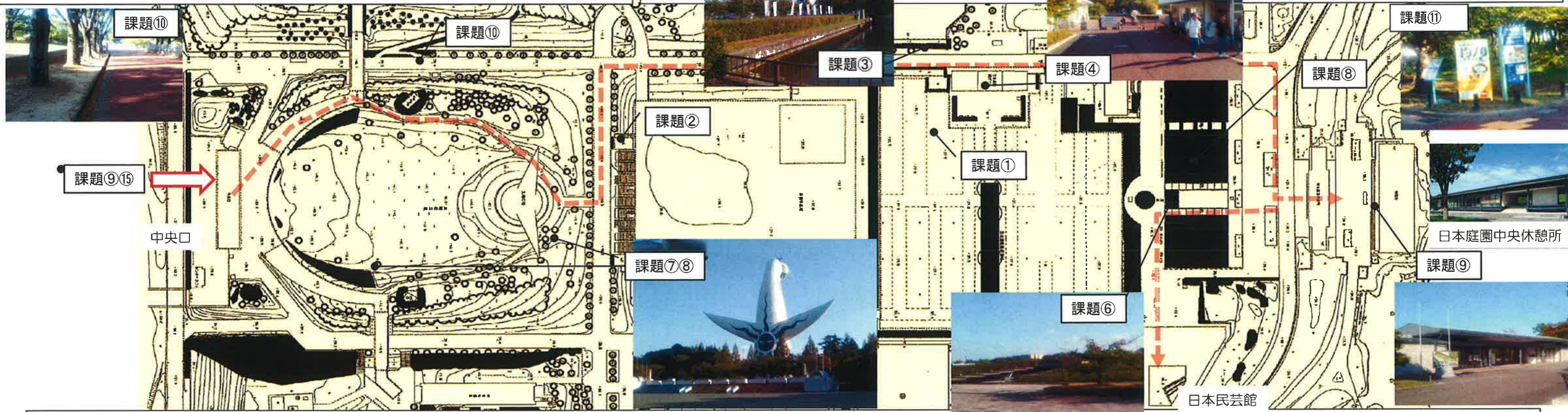
- ④園路の狭隘な箇所が存在。線形も折れ曲がり、歩きにくい。
- ⑤広場の構造物や駐車場が歩行者動線を分断している。
- ⑥バラ園の階段状構造や噴水、腰積などにより、民芸館・博物館・日本庭園間の動線を阻害。

【景観】

- ⑦太陽の塔の眺望を阻害している樹林地や老朽施設が存在。
- ⑧樹木の繁茂や老朽施設、駐車場などにより、中央口から日本庭園までの眺望が阻害。
- ⑨日本庭園中央休憩所が老朽化。日本庭園の正門が庭園内の景観を遮断し、シンボルゾーンとしての見通しを阻害。
- ⑩中央口から日本庭園までの動線上に擁壁などの人工物が目立ち、景観を阻害している。
- ⑪サインが多く設置され、統一感がなく、景観を阻害。

【施設】

- ⑫ゆっくり落ち着いて眺望や景観を楽しみながら休憩や食事等ができる場所がない。
- ⑬食堂や売店が老朽化、魅力のあるデザインではない。
- ⑭太陽の塔を觀賞できる食堂や休憩所と言った場がない。



3. 整備の方向性

- ・景観：シンボルゾーン一体を雄大で美しい緑空間とする。
中央口から日本庭園へのビスタの形成。繁茂しすぎた樹木の景観に配慮した整理、景観を阻害する老朽化施設の撤去、遮蔽。
日本庭園の魅力を高める中央休憩所の整備、シンボルゾーンとしての一体性をもった景観を形成するため正門を撤去、和の文化の発信拠点となる日本庭園正門周辺の改修
- ・動線：自然な線形となるように園路を改修、動線上に憩いと魅力を生み出す親水空間の整備。
- ・施設：憩いや安らぎのある広場、明るい樹林の形成、来訪者が気楽にくつろぎ公園を楽しめるカフェ、休憩所等の設置。
多様な文化イベントを開催できる広場の確保

雄大で美しい緑空間の形成

収支シミュレーションのうえ短期・中期・長期の整備内容を設定する。

施設の連携を促す広場の整備



休憩施設の設置



バラ園



民族学博物館

眺望確保、カフェ

太陽の塔

太陽の塔前
広場

中央休憩所
(和食の拠点)

スロープ

新設園路

カフェの設置

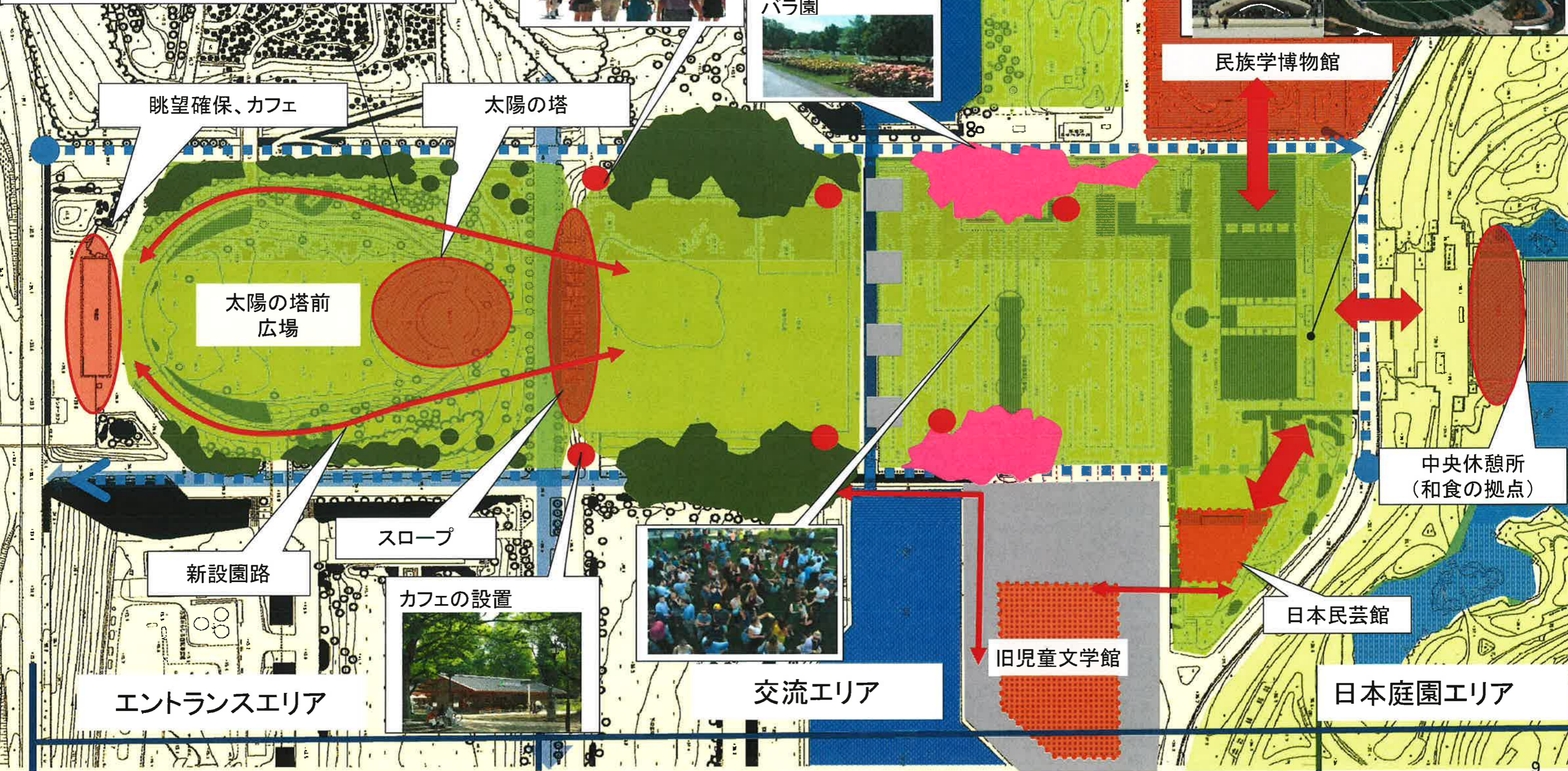
旧児童文学館

日本民芸館

エントランスエリア

交流エリア

日本庭園エリア

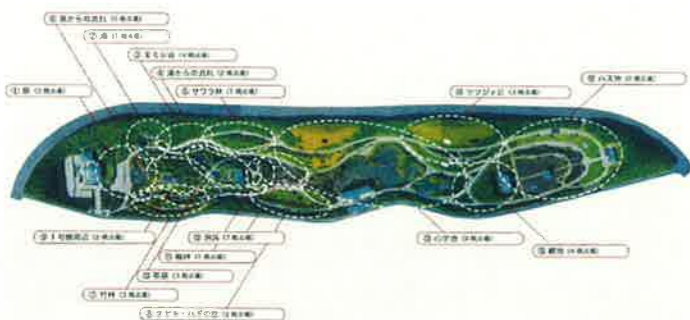


【方向性】

- 世界の人々が感動する日本庭園を育成する。
- 感動を生む質の高い管理、質の高い景観。
- 既存の魅力をしっかりとPR、海外からの評価を高める。
- 鑑賞だけでなく、「和の文化」の体験の場として活用する。
- 日本文化、上方文化の体験・観賞プログラムを提供する。

【景観育成】

- 主要な景観ポイントの重点管理
 - ・16景、54視点場を重点管理する。
 - ・視点場の表示



【魅力づくり】

- 食の拠点の誘致。
 - ・中央休憩所付近：料亭（割烹）、和風レストラン、伝承料理など
 - ・茶室：会食の場（貸し出し）呈茶
- 庭園の様式を強調。
 - ・上代：寝殿造り、近代：舟遊びなど
- 見所、イベントの拠点
 - ・能楽用平舞台、洲浜の活用

【ニーズ】（大阪観光局ヒアリング）

- ・来阪の観光客は「たべる」、「買い物」、「まち歩き」を堪能。
- ・万博は良いコンテンツ、海外の観光業者への広報や周遊パスなどへの組み込みが有効。
- ・コンビニ、レストランがあり、手ぶらで来ても食事について心配が無いことが大切。日本人と同じ体験をしたい。
- ・和をテーマとした観光ホテルがあれば1日滞在する観光客も確保できる。大阪には和のホテルが少ない。（遠い）
- ・民芸館は陶器を（安価に）買うことが出来るのが魅力。

【日本庭園の幅広い活用】

- ・日本の庭園は祭祀や儀式の場に始まり、外交、情報交換、文化の発信、鑑賞の対象となり、社交の舞台ともなった幅広い使用がなされた。
- ・現代の万博日本庭園においても、鑑賞のみならず、その美を資源として体験、イベント、レクリエーションの場として幅広く活用していく。

【日本庭園と公園施設の役割分担】

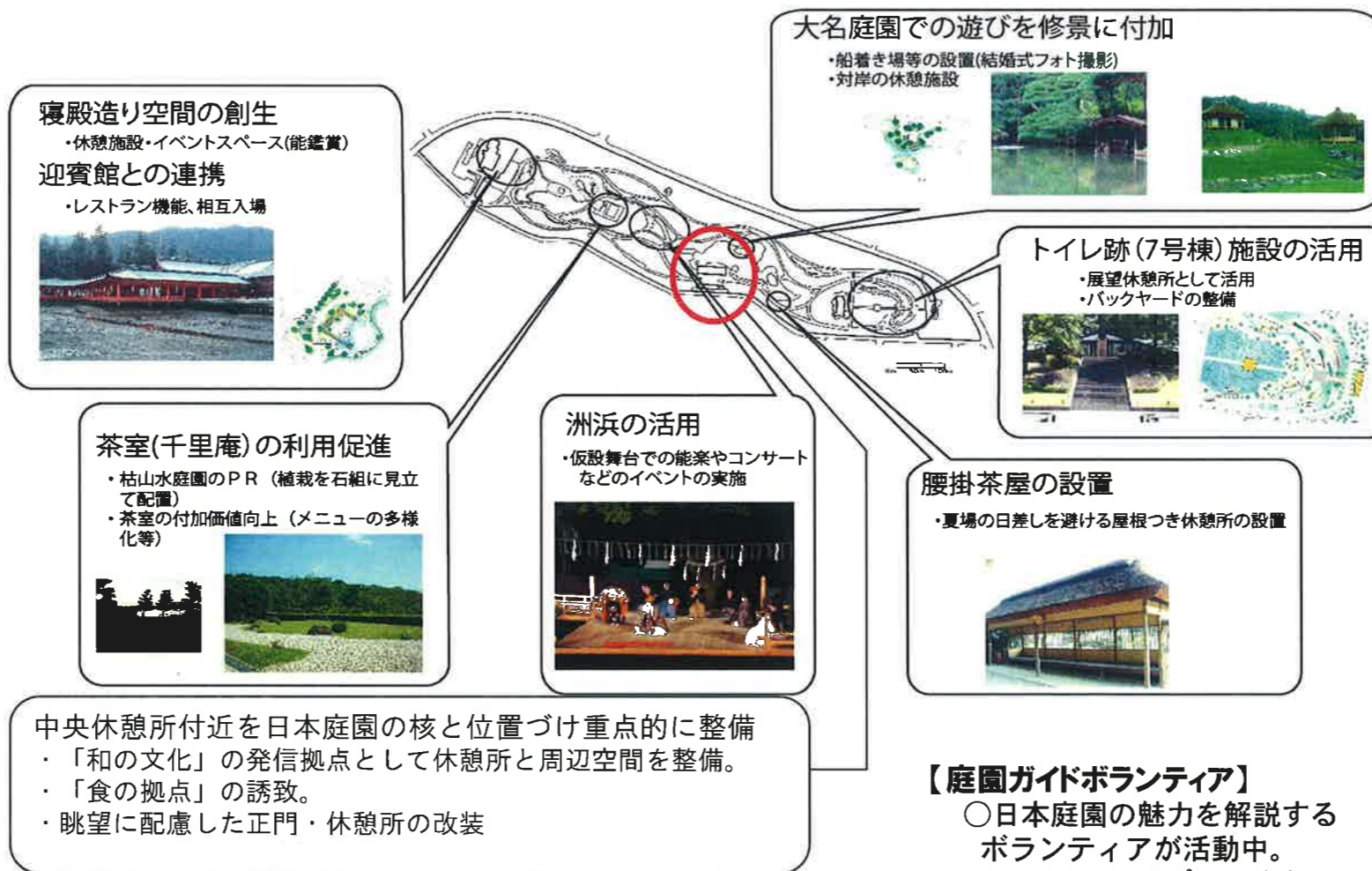
【みどり】	
	要素
日本庭園	○造園技術 ○自然との共生
自然文化園	○生きものとの触れ合い ○テーマ園（四季の変化）
緑地広場	○緑のなかでのイベント ○憩い・運動

【日本文化】		
	要素	テーマ
日本庭園	○日本の造園技術 ○日本の建築	○自然の美しさ
民族学博物館 《日本展示》	・祭りと芸能、日々の暮らし、沖縄の暮らし、多みんぞくニホン	○日本文化の多様性 ・「ハレ」と「ケ」
日本民芸館	○民芸品（陶磁器、染織品、木漆、編組品など国内外の民芸品を展示）	○民芸品の素朴な美

	要素	テーマ
○日本庭園		日本の食 (中央休憩所、茶室)
○南側ゾーン		フードエンターティメント（世界各国の食、地元大阪の食）
○ホテル阪急 ○太陽の塔周辺 ○広場		世界各国の食・日本料理 カフェ・軽食 イベント（ラーメン博、まんぱく、ロハスなど）

日本庭園の魅力向上 イメージ案

- ・バリアフリー化
- ・アメニティの強化(イベントの実施、解説板の設置)
- ・滞留機能の強化(休憩施設の適切な配置)



【海外からの評価を高める】

- “Journal of Japanese Gardening” の世界の日本庭園トップ10入りを目指す。
- 海外を知り、また世界からお注目をあつめる茶人による茶室・茶事のプロデュースなどを検討
- 海外からの旅行者が喜ぶ茶の湯体験プログラムを開発

【サービス向上】

- 和の文化の発信
 - ・体験プログラムの提供
 - ・園芸文化の発信
 - ・伝統園芸植物の展示
 - ・日本の季節の行事
- 解説の充実
 - ・初心者も分かりやすい見所の解説を充実させる。
- ネーミング
 - ・日本庭園には「後楽園、偕楽園」などの名称がつけられていない。分かり易く、親しみやすい庭園とするため、「日本庭園全体」「滝」「泉」「洲浜」「1号棟から7号棟の休憩所」などに名称をつける。

【イベント】



日本の誇る園芸文化の発信（案）

■万博記念公園で発信すべき園芸文化

○公園には、利用者に愛され、海外にも愛好家を持つ日本発の園芸植物や四季の無い国々の方に感動を与える植物などが存在する。これらの植物を中心として園芸文化の発信を図るものとする。

○日本庭園を園芸文化の集大成として、集中的に発信の拠点とする。

■方向性

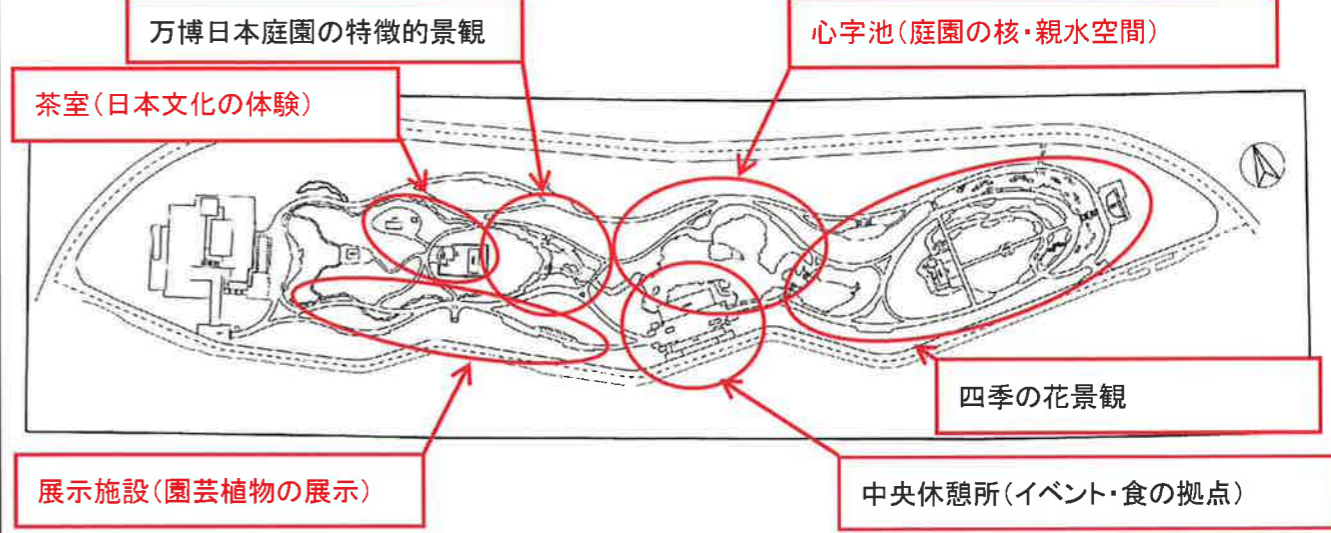
- ①庭園建設の際に収集された園芸植物を保存し、質の高い景観として利用者に見せる。（茶庭など）
- ②園芸を取り巻く『和の文化』を見せる施設を目指す。（品種名の解説、日本の伝統行事、プログラム提供など）
- ③利用者が『和の文化』を体験できる施設とする。（ガイドボランティア、抹茶・いけばな・習字等の体験）

■園芸品種の保存と収集について

これまで収集してきた品種を適切に保全し、長期的に鉢花の展示を行う。これに必要な苗圃機能を確保するとともに、高度な園芸技能を有する管理者を確保することで、高質な園芸植物の維持を図る。

また、園芸植物を保有する各種団体等との連携を図り、多彩な園芸文化の展示を庭園内で実施できるようにする。

日本庭園における園芸文化発信の拠点イメージ



■日本庭園における和の文化の発信

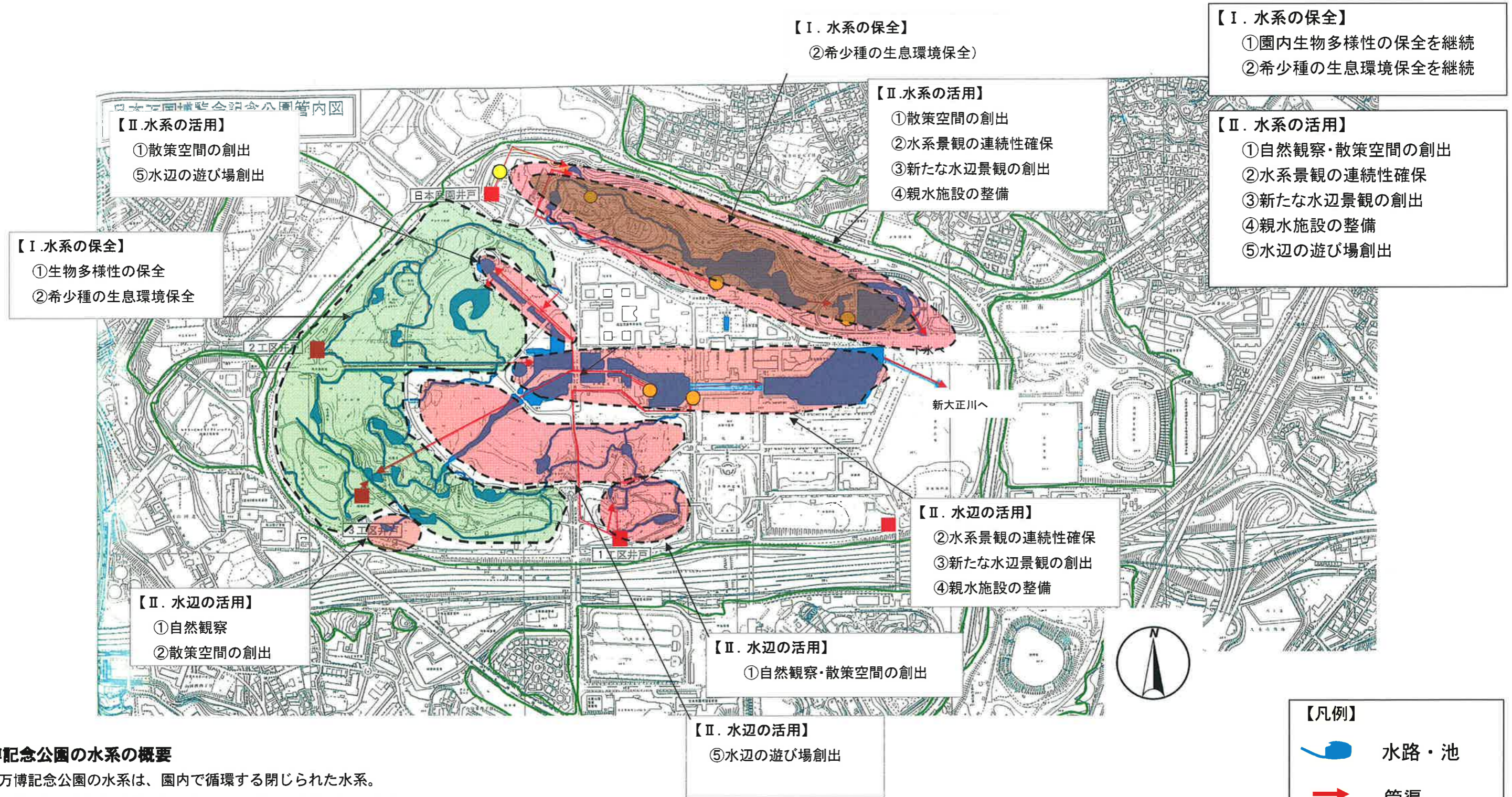
		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
通年のプログラム		庭園セルフガイド 和食の提供											
繁忙期のプログラム				呈茶	庭園周遊ガイド	心字池船周遊							
季節毎のプログラム (ポテンシャル)	展示 イベント 体験	成人式イベント 鏡餅・トンド焼き 門松 餅花 羽子板 錦糸南天展	福寿草の展示 節分(追儺式) 柊鰯	春の山野草展 雛祭り、彼岸 飾り蛤 コモト(啓蛰)	春咲えびね展 野点 桜草展	端午の節句 こいのぼり 八十八夜 しょうぶ湯(移動足湯) 牡丹展	螢のタベ 俳句コンテスト 薪能 生け花展・華道体験 銘木クロマツ剪定	七夕まつり 鉢物朝顔展示 写真コンテスト 早朝観蓮会(ハス池)	風鈴 地藏盆(もどき) 浴衣イベント 燈花会、 夕涼み、ライトアップ	いけばな展 鈴虫の鳴き声 風呂敷包み教室 名月観賞	能鑑賞会(能舞台) 秋の山野草展 月見(中秋の名月) 菊花展、茶室公開	七五三 万年青展示 紅葉まつり(ライトアップ) 茶室公開、 一般クロマツ剪定	干し柿 雪吊り 門松づくりイベント 冬支度(コモまき) 椿の活花展示
	園内みどころ植物	ハス池池干し・ハ ス刈取り 寒椿 ナンテン	梅 椿 スイセン マンサク、ロウバイ	モモ、ツクシ 辛夷 木蓮	桜、クルメツツジ 菫、フジ 柳新緑 筍販売	藤 卯の花(ウツギ) 花菖蒲 躑躅、牡丹、芍薬	梅の実の販売 紫陽花 泰山木 ギボウシ、クチナシ	水連 ハマボウ 半夏生	百日紅 ミソハギ	ハチスの販売 薄 彼岸花 ハギ、ヤブラン	銀杏 金木犀 菊、十月桜 団栗ひろい	紅葉狩り 山茶花 ツワブキ	ヤツデ クロガネモチ ノジギク
	食	七草粥 お雑煮、おせち 鏡餅	恵方巻き 福豆	甘茶 蒟の羹 土筆	春の山菜 春の土用(「う」)	茶づくり体験(新茶) ちまき 柏餅		蓮料理 象鼻杯(ハス池)	水菓子 素麺	クリ 梨	団子 土瓶蒸し 朴葉味噌	柿 銀杏、栗 押寿司(柿の葉寿司)	かぼちゃ 柚子 おせち、そば

■手法

○民間参加によりプログラムの提供を図る。有料プログラムの提供による収支の均衡。

- ・料亭（割烹）などレストラン事業者の誘致による和の食文化
- ・茶室・茶事のプロデュース
- ・園芸植物の販売
- ・観光客向け、茶の湯体験プログラム、華道・書道など体験プログラム

1. 万博記念公園の水系の保全と活用



万博記念公園の水系の概要

- 万博記念公園の水系は、園内で循環する閉じられた水系。
- 自然文化園を循環する水系、日本庭園を循環する水系がある。
- 水源は井戸水および天水。
- 自然文化園水系設計の当初思想は、鑑賞や遊びの機能と併せ、山中の自然と同様、自然文化園内の水系から水を溢れさせ、樹林地内に適度に灌水させるための水系であった。
- しかし、井戸の水量が期待したほど豊富ではなく、溢水は断念。代わりに樹林地内に水系を張り巡らせ、蒸散する水蒸気により樹木の成育を助けることとした。
- そのため、森のある自然文化園西側には、水路、池が多く配置されている。

【凡例】

- 水路・池
- 管渠
- 井戸
- ポンプ

	【Ⅰ. 水系の保全】	【Ⅱ. 水系の活用】
現状・課題	○植栽の繁茂、土砂の堆積・流失による水辺構造の単純化 ○水系の存在により、周辺樹林地の湿度が確保。	○景観上、分断された水系。 ○樹木の繁茂等により遮蔽され、良好な水辺景観が乏しい。 ○休憩施設等、水辺空間の施設活用が乏しい。 ○上記理由により、水とのふれあいの場が消失。
目標像	○生物多様性豊かな水系の維持・保全・再生 ○国内希少種が生息する貴重な水系維持 モリアオガエル、ニッポンバラタナゴ、イタセンパラ、ゲンジボタル、ヘイケボタル等々	○休息、遊び、学び、散策が楽しめる水系。 ○多くの人を引き付ける多彩で良好な水系・親水空間。
対応手段	①園内生物多様性の保全を継続 ②希少性の生息環境保全を継続	①植栽整理による、自然観察・散策空間の創出。 ②水系景観の連続性確保。 ③新たな水辺景観の創出。 ④親水施設の整備。 ⑤水辺の遊び場の創出。
年次計画		
短中期 ～2020)	・生物多様性に配慮した施設整備及び植栽管理の継続 ・園内水系頼りに生息する国内希少種の保全 ・生態系に影響を及ぼす、特定外来生物の駆除	・自然観察・散策空間の創出(周辺樹木整理・浚渫・未生木撤去等による水辺景観・空間の改善)。 ・水遊び空間の創出(浚渫の実施、水中柵・安全施設等の設置)。 ・シンボルゾーン、日本庭園において親水空間を整備。
長・長々 期 ～2070)	・上記内容継続	・新たな水辺景観の創出・親水施設の整備 自然文化園(水辺のレストラン・親水デッキ・休憩施設等の施設設置) 日本庭園(中央休憩所改修、船着き場等修景観施設の設置) ・水系景観の連続性確保 水澄ましの池～夢の池～日本庭園に至る水系の連続性を親水施設整備と併せ修景。
プログラム	・市民参画による自然環境保全の取り組み拡充(水系動植物調査・水辺自然環境保全・再生)	・親水空間を利用したイベント開催 自然文化園:自然観察や環境保全型農業体験等の体験型プログラムの開発 日本庭園: 水辺空間を活用した新たな集客(ホテル観賞会、観蓮会の継続も含む)イベントの開発
備考		

交流と創造（プログラムの提供）（案）

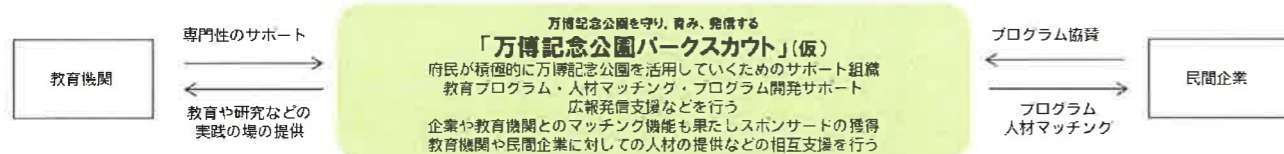
■プログラム提供の方向性

- 利用者が簡単に体験することが出来るプログラム。家族連れ、母親向け、子ども向けメニューの充実。
- プログラム提供拠点の整備。
- 多様な主体（府民、事業者、企業、NPOなど）が利用者にプログラムを提供。
 - ・海外旅行者も楽しむことが出来るプログラム。
 - ・生活習慣と関連するプログラム。
 - ・平日に提供できるプログラム。
- 多様な主体がプログラムを提供するため、支援機能（コーディネーター）を設置。
 - ・人材育成、マッチング、プログラム開発サポート、広報支援、共同イベントのコーディネートなど。

■プログラム提供団体へのサポート機能

多様な主体が園内で利用者に対してプログラムを提供するためには、行政と団体の間でコーディネーションを行う機能が必要。

ボランティア・NPOへの活動についての助言、教育プログラムの開発・提供、企業とボランティアのマッチング、プログラムの開発支援などの専門知識を持った人材がこれにあたる必要がある。



府民NPO団体等の活動・交流拠点としての「万博記念公園パークスカウトハウス」の設立^{※1}

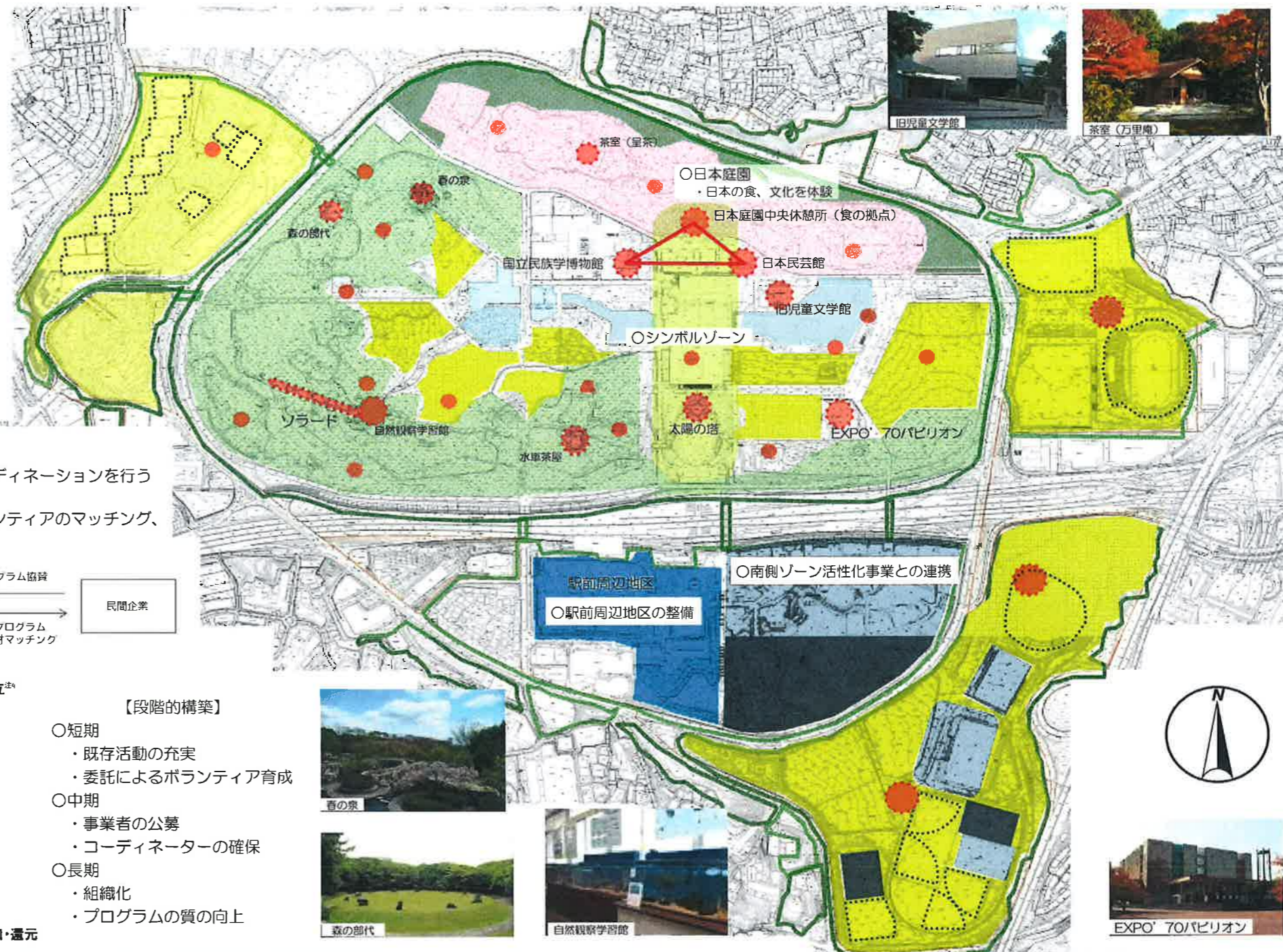
- 自然観察学習館を活用し、府民団体の活動のサービスステーションとして整備
- 各種府民団体の結成や団体間での交流を促したり、団体運営の相談に兼る人材を配置し、参加したい個人と受け入れ団体の仲介など各種サービスを提供できるサポート体制を整える
- プログラムコーディネーターや公園インタープリター^{※2}、通訳ボランティアガイドなどの人材を育成（参考事例：東京ガス「環境エネルギー館」^{※2}）
- NPO団体とも連携し、食（生産から加工までを体験）、環境、緑地管理、自然科学など様々なテーマでのプログラムを開発し実施
- 南側活性化事業内の英語村、海遊館等周辺施設との連携プログラムの受け入れ先としての機能^{※3}
- いずれはパークスカウトハウス自体が府民によって運営されていくことをめざす^{※5}



府民・NPO・団体などは教授したサービスを公園内で実施する様々な活動を通じ公園運営に参加・還元

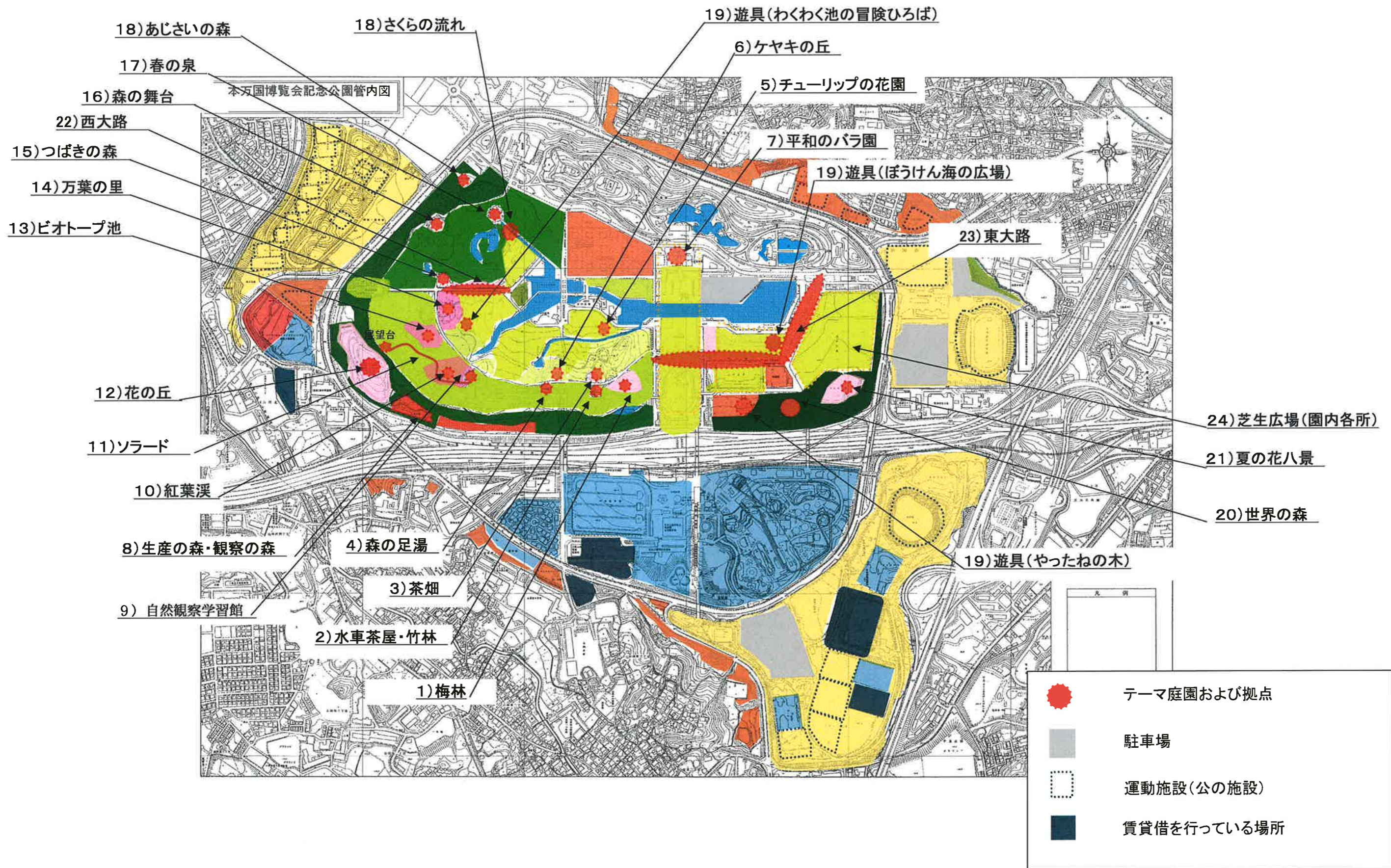
【段階的構築】

- 短期
 - ・既存活動の充実
 - ・委託によるボランティア育成
- 中期
 - ・事業者の公募
 - ・コーディネーターの確保
- 長期
 - ・組織化
 - ・プログラムの質の向上



	太陽の塔 (シンボルゾーン)	日本庭園中央休憩所 (心字池周辺)	春の泉・森の舞台	自然観察学習館 (森)	水車茶屋 (茶畑周辺)	森の足湯	芝生広場	陸上競技場 (外周道路)
ポテンシャルおよび諸元	延床面積 1,810㎡ ・生命の樹および「地底の太陽」を再生。	延床面積 1,413㎡ ・心地池、築山など良好な景観。	春の泉 約3000㎡泉、石積の岩、洞窟。 森の舞台 直径42mの円形芝生広場	学習館 延床面積 623㎡ 空中観察路(300m×1.2m、H=3~5m)	敷地面積 1,166㎡ 建築面積 192㎡ ・「里の景観」の中核施設。	敷地面積300㎡ 薪ボイラーとスターリングエンジンによる給湯と発電。 定員(建屋内6名、外湯9名)	上の広場 7,700㎡ 下の広場 8,000㎡ 東の広場 37200㎡ もみじ川広場	55,000㎡ 外周道路(自転車道)
提供プログラム(案)	○太陽の塔(および博覧会遺産)のガイドツアー ○芸術作品の展示	○和食(薬膳)提供 「園芸文化の発信」において詳述 ○書道、舞、着付けのミニ体験	○芸術作品の展示会 ○企業の新商品体験(福祉器具など)	○森の再生、生物の保全活動講習 ○家族(子ども)向け観察・体験会 ○ナイトツアー	○ミニイベント ○講習会(撮影・絵画など) ○公園植物の利用(つばき油、お月見、よもぎ餅など)	○季節の足湯 ○資源循環の解説 ○森の育成PR	○大規模イベント ○コンサート ○健康(ヨガ、スロージョギング等) ○新たな緑の使い方(ピクニック教室等)	○トライアスロンの(自転車&マラソン)トレーニング支援。
プログラムの提供手法(案)	○ボランティア養成 ◎耐震改修、展示物の再生	○事業者の公募 ◎座敷、厨房用配管の設置	○事業者の公募	○事業者の公募 ○ボランティアとの協働	○プログラム提供者の募集 ◎音響設備など付加	○事業者の公募	○プログラム提供者の募集 ◎設備配管配管など	○事業者の誘致

交流と創造（テーマ庭園の管理と活用）（案）



交流と創造（テーマ庭園の管理と活用①）（案）

9-3

	1)梅林	2)水車茶屋・竹林	3)茶摘みの里	4)森の足湯	5)チューリップの花 園	6)ケヤキの丘	7)平和のバラ園
設計思想	昭和 58 年度より品種数世界一を目指して整備を開始。平成 10 年度からは梅研究会の協力の元 210 品種まで集めたが、園地の場所不足に加え、PPV 発症により苗圃を全伐。現在に至る。	計画当初より「里の景」の拠点として整備。 万博開催以前の都市近郊の農村風景をモチーフに、農家風の休憩所、水車等農家の庭をイメージ。	計画当初より都市近郊の「里の景」を表現するために整備された。 近年、樹勢劣化が激しくなり、H25 年度より3カ年計画で土壌改良・改植を実施	樹林地管理に伴い排出される木質バイオマスの有効利用を目的に「循環市民の森づくり」としてH17～H22年度にかけて薪ボイラー、スターリングエンジンを使用したコージェネシステムを実証実験。 H18年度より、排熱を利用した足湯を開設。年間23,000人の利用者ある人気施設。	計画当初は芝生広場であったが、平成に入り、新たな花の見所として整備。 チューリップとひまわりの時期は多くの来園者でにぎわうエリア。	計画当初より、芝生広場を望む眺望を生かした休憩スペースとして整備される。	万博当時に、カナダモントリオール・レイクシエア・ロータリークラブの呼びかけにより世界9か国から寄贈されたバラを保存している。
緒元 （面積、主要品種・本数）	約 5,500 m ² の園地に 128 品種約 600 本を植栽 白加賀、八重寒紅、道知辺、青軸・月影、春日野、香篆など	敷地面積 1,166 m ² 建築面積 192 m ² 昭和 48 年に移築された水車（昭和 28 年作成）が設置されている。	約 8,000 m ² ヤブキタを植栽。 府内最大級の茶畑である。	足湯施設 内湯定員 6 名 外湯定員 9 名 薪ボイラー、スターリングエンジン	約 4,000 m ² 春：チューリップ 25 品種 24,000 球 夏：ひまわり22品種 10,000 本	約 3,700 m ² ケヤキの並木 ウバメガシ、アベリア、プリペットの刈込	約 6,000 m ² の花壇に、125 品種、約 4700 本のバラが植栽される。 市場流通の少ない古い希少品種が多いため、品種保存が懸案である。 アイリッシュミスト、タウンクライヤー、アンネのバラ、グリーンローズ等
管理内容	剪定、刈込、除草、施肥、灌水、摘果	竹林はNPOが管理（間伐・タケノコ掘りなど） 庭部分は草刈、剪定が定期的になされている。	刈込、剪定、除草、施肥、深耕、灌水	NPOが管理運営。スターリングエンジンはNPO側が所有・管理。 年間 150 日程度の稼働。 発電は足湯の照明等に利用。 先行事例として、県外の関係者及び環境省関係の視察が多い。	NPOがボランティアを募集して管理	刈込、除草	剪定（冬季・夏季）、摘花、結束替え・誘引、施肥、灌水、人力除草、芝刈、壁泉清掃、薬剤散布、など
課題	周辺樹木による日照不足。 来園者の増加による踏圧障害。 PPVの発症 冬季のみ来客多く、通年の魅力向上。	農家の庭先をイメージした設計であるが、庭の彩が少なく、周囲の樹木が圧迫し、少々陰鬱なイメージとなっている。	土壌の劣化、植栽株の劣化	利用者多く、薪ボイラーの過剰使用が続き、更新が必要。 足湯建屋等の更新必要。	チューリップ、ひまわりの時期は来園者多いが、その他の時期は閑散。	周囲の高木及び低木が繁茂しているため、眺望が無く、余り利用されていないデッドスペースとなっている。 舗装の破損も多い。	品種の保全 土壌の改良
行事	2月に「梅まつり」が開催される。	梅まつり、茶摘み体験等の拠点となっているほか、自然観察の集合拠点やグループでの来園の際の集合場所としての利用も多い。	5月に「茶摘み体験」が開催される。	四季に合わせた薬草湯が人気	「チューリップフェスタ」「ひまわりフェスタ」を開催 ・ミニコンサート ・近接するカフェでスペシャルメニューを販売	無し	5月に「ローズフェスタ」開催される。
目標像	ウメの樹下で花見ができる空間づくりと演出	農家の暮らしを楽しみながら憩える里のゾーンの拠点にふさわしい景観づくりと演出	お茶の緑の畝が広がる茶畑の景観再生	木質バイオマス利用の啓発施設として、更なる利活用の拡大。	疎林に囲まれた花の展示園。 休憩スポットや隣接するパークカフェと一体的に利用できる空間づくり。 夏季の花修景の検討。	芝生広場を望む眺望を生かした休憩場所	将来ビジョンシンボルゾーンにおいて検討
対応手段	ウメとサクラが混在する梅林環境を改善し、面的に梅の開花が充実する園地づくり ウメの開花期以外でも四季を通じて楽しめる園地づくり 品種の増加	周囲の杉林の下枝除去。 庭先の彩により、華やかさを演出する。 古農具等の設置により農家の雰囲気を出す。	茶畑の土壌改良及び改植	高性能薪ボイラーの導入 建屋等の改装	周辺疎林からチューリップの花園の見通しを確保 観賞機能に加え、チューリップの花園を使う空間の演出	強度の刈込、周辺支障木の撤去、剪定等を行い、眺望を回復する。 併せて屋根つき休憩施設の整備と舗装の改修を行い、利用度の高い休憩場所を再現する。	将来ビジョンシンボルゾーンにおいて検討
提供するプログラム	ミニコンサート 臨時の茶店開店 ウメの実、梅関連製品の販売	休息 茶摘み、梅まつり等の拠点	海外の来園者も参加できる茶摘みのイベント	足湯の利用 バイオマスの先進的活用事例	スペシャルメニュー		四季イベント

交流と創造（テーマ庭園の管理と活用②）（案）

	8)生産の森・観察の森	9)自然観察学習館	10)もみじ溪	11)ソラード	12)花の丘	13)ビオトープ池
設計思想	元々もともと奥深い密生林として整備されたが、土壌条件が悪いため樹木が育たず、昭和57年度より土壌改良を開始、現在は生産の森として水田、果樹園が、観察の森として各種樹木が植栽されている。	昭和60年3月に万博開催15周年を記念して設立。 万博記念公園新SATOYAMA宣言(H24)では、自然(緑)のエントランス機能として活用	紅葉樹を中心にした明るい樹林地と溪谷をイメージした水系が配置された自然観察の場所 自然観察学習館、ソラードと一体の樹林地	西暦2000年(H11年)に、「万博開催30周年記念事業」として、豊かに成長した森を、これまでのように下からだけでなく樹冠や木の側面などを立体的に観察することで、来園者に新たな森の魅力を発見してもらうことを目的に、整備	元々もともと奥深い密生林として整備されたが、土壌条件が悪いため樹木が育たず、昭和57年度より土壌改良を開始、昭和63年度よりコスモス等の植栽を始めた。現在では「花の丘」として鑑賞スポットとなっている。	元々菖蒲園であった場所を水生生物や昆虫などを観察できるビオトープ池に改変した。
緒元 (面積、主要品種・本数)	生産の森 4,000㎡ 観察の森 6,000㎡ 境の木製風車、カブトムシ小屋	682㎡鉄筋Co造 1F建て 開館時間 10:00～16:00 展示コーナー 実習コーナー 森の教室	約5,000㎡ ヤマモミジ、イロハモミジ、ウリカエデ、アメリカカワウ、タイワンフウ等、紅葉する樹木を植栽。 中心部を流れる水系の源流は毎分12トンの水が流れる高さ6mの滝。溪全体では約4,500トンの自然石が使用。	鋼材・木材による歩道橋形状の回廊及び展望施設 空中観察路：延長約300m 幅1.2m 高さ3～10m 木登りタワー：13.5m 展望タワー：19.0m	約20,000㎡ 内花壇部分は10,000㎡。その他は芝生地。 春と秋にポピー、コスモスを植栽。	池を含め、1,381㎡ モリアオガエル、ニッポンバラタナゴ、ミドリシジミ等が生息している。
管理内容	NPOが市民参画にて管理	職員5名(非常勤職員) 2団体約90名のボランティアが活動。	除草、清掃、剪定	日常点検、定期点検、修繕再塗装	草花植栽管理一式	自然観察学習館のボランティアによる管理が中心である。
課題	場所が園路より離れているため、目的を持った来園者しか訪れない。	更なる活用を進めたいが、施設規模、マンパワー共に飽和状態。	クヌギ・コナラ等の落葉樹のナラ枯れ踏圧による土壌の劣化による樹木の衰退。 アメリカザリガニ等外来生物の侵入	利用頻度が高く、修繕が絶えない。 カメラマンのマナー対策	草花がメインのため雨水による土壌流失が著しい。 元々土壌が悪いため、高木が生育せず、木陰等の整備が困難。	施設の老朽化。 アメリカザリガニ、ウシガエル等外来生物の侵入。
行事	NPO活動にて、農作業体験や自然観察学習会等、多くのイベントが実施されている。	年間利用者11.8万人 各種イベント・学習会130回/年 「カワセミだより」発行12回/年 他団体開催イベント 年数回	学校遠足、自然観察学習等が多く行われる。	小学校遠足での利用は定番 新緑・紅葉期には多くのカメラマンを含む来園者が利用する。	ポピーフェスタ、コスモスフェスタの開催 ・ミニコンサート ・花苗・鉢バラ、球根などの販売 ・フラワーアレンジメントレッスン	ボランティアによる月一回の管理活動の他、自然観察学習等のフィールドとして利用されている。
目標像	都市の中で気軽に学べる環境学習・農作業体験の場	万博公園の自然へのエントランス～自然の大切さに「出会う」「実感する」「実践する」楽しみが見つかる場所～	自立した森の中にあらわれるもみじ林、明るく樹林や滝に流れがあるもみじの溪谷	森の空中観察回廊として、今後も維持	樹林地の中に現れる、眺望の良いお花畑	北摂の自然を感じることができる自然観察園
対応手段	NPO活動のますますの活性化	職員と現ボランティアメンバーだけではこれ以上対応は困難。 更なる他団体との提携による活性化	自然観察学習館とのタイアップ	定期的な再塗装も必要	土留め等の施工	木製デッキの補修等
提供するプログラム		環境学習、研究、実験、等	環境学習、研究 紅葉の鑑賞	写真撮影 花の鑑賞	四季イベントの開催	市民参画による環境保全活動

交流と創造（テーマ庭園の管理と活用③）（案）

9-5

	14)万葉の里	15)つばきの森	16)森の舞台	17)春の泉	18)アジサイの森 桜の流れ	19)遊具
設計思想	計画当初より「はぎの原」として整備されたが、花の見所をの更なる向上のため拡充。全体で「万葉の里」とした。萩を中心に、ススキ、オミナエシ、フジバカマ、キキョウ、カキ等を配置して秋の里山の風情を醸し出すという設計コンセプト。	冬季の花の見所を増やすため、当初計画で「マグノリアの林」とされていた場所にツバキを植栽。H8年度に完成。	直径42mの舞台状になった円形芝生広場。舞台上には大小12個の石（鞍馬石）が設置され、12支の動物を表している。	元々、子供の冒険の場として整備された。現在は落ち着いた遺跡の雰囲気があり、休息の場となっている。水鳥の池と隣接しており、今後は自然観察学習の場所として利用可能	昭和59年度より花の見所を整備するため植栽を開始し、平成6年度に現在の形となる。踏圧障害、樹木の繁茂が顕在化したため、H23年度より再度上層部を覆う樹木の間伐、園路設置による踏圧回避を実施、現在にいたる。	来園する複数団体に対応するため、園内3か所に大型複合遊具を設置。 設置年月日 「やったねの木」H16年度 「わくわく池の冒険ひろば」H22年度 「冒険海の広場」H23年度
緒元 （面積、主要品種・本数）	約110,000㎡ 平成11年度に整備 ミヤギノハギ、ヤマハギ、シロハギ、秋の七草	約4,700㎡にツバキ、品種サザンカ、品種春サザンカが108品種282本を植栽。 ヤブツバキ、祝いの杯、岩住、桃割	約6,500㎡ 平坦部は芝生地であり、斜面地は、ヒガンバナ等が植栽されている宿根草花壇がある。		約4,000㎡の園地に30数品種4,000株のアジサイを植栽	
管理内容	剪定、除草、灌水等	剪定、除草、施肥、マルチング工、摘花・摘蕾、摘果、灌水	芝刈、除草、剪定、灌水等	除草 一部花壇については市民参画によりNPOが管理	剪定工（夏季・冬季）、除草、施肥、灌水、移植、マルチング工	
課題	各植栽が小区画でインパクトに欠ける反面、シバザクラが広範囲に植栽されており人気となっている。 ススキの繁茂など、内部に入ることをためらう景観となっている。	土壌が粘性土で排水性が悪く、総じて根系が貧弱。時折突然死が起こる。	かつて周囲に宿根草が植栽されており、良好な景観であったが、現在は衰退し、周囲の樹林地も被圧を強めているため、孤立したイメージである。 園路からの視認性が少なく、利用者が少ない。	利活用の手法 モルタル劣化により石の剥落が懸念	【アジサイの森】 植栽本数の回復 【桜の流れ】 植栽木の衰退。景観の悪化 春季の桜と、雨季のアジサイがメインであったが、双方衰退しつつあり、抜本的対策が必要である。	利用過多による修繕 （消耗品の取り換えが基準期間の1/2） 利用の多いときは警備員配置必要
行事	特になし。	2～3月に「つばき祭り」を開催	特になし	自然観察学習の場	6月に「あじさい祭り」を開催	
目標像	万葉の草花をテーマとした展示園	珍しい品種のツバキが集まる展示園	森の中に広がる、不思議な舞台	人工的な環境の中に自然の力強さや豊かさを感じさせる空間づくり	樹林地の明るい木立の中に広がるアジサイの群落。 せせらぎの音を感じながら散策できる花空間	子供たちが元気に安全に遊べる魅力ある遊戯場
対応手段	シバザクラは「万葉の里」のコンセプトとは違い、今後は、徐々に他所に移植し、在来種を中心とした植栽に変更していく予定。 ナンバンギセルを保全しつつススキの刈り込みを実施。	排水性改良を主とした土壌改良	周辺樹林地の整理 宿根草の補植による、景観の再生		【アジサイの森】 補植による植栽株数の増加 【桜の流れ】 衰退したヤナギの除去とサクラの新植 アジサイの移植と補植	定期的（約15年）な遊具の更新。
提供するプログラム	写真撮影 花の観賞	四季イベントの開催	・アート展示	・アート展示	・あじさいまつり ・俳句コンテスト ・あじさい市	

交流と創造（テーマ庭園の管理と活用④）（案）

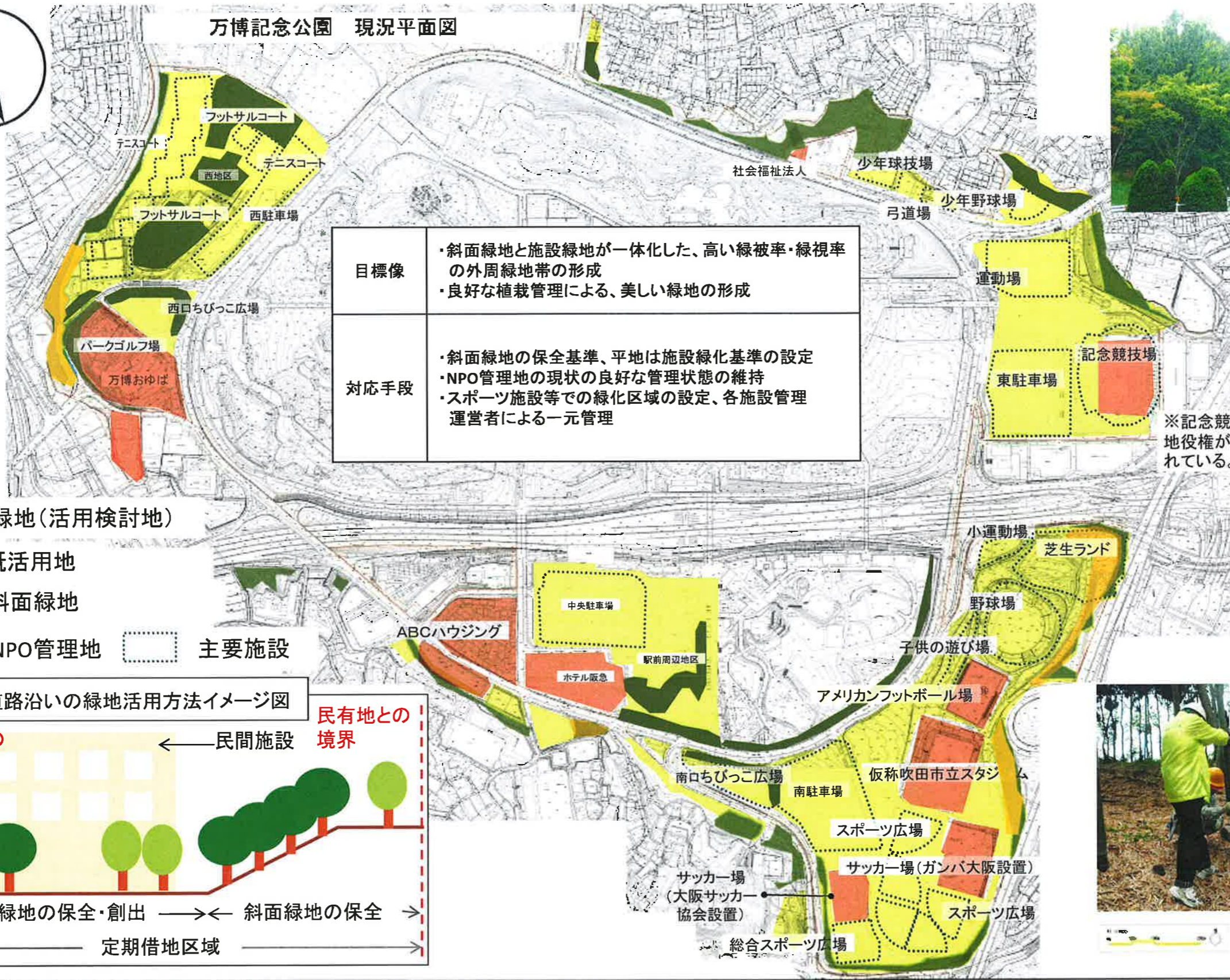
9-6

	20)世界の森	21)夏の花八景	22)西大路	23)東大路	24)芝生地（散開林）
設計思想	万博後、世界から寄贈された針葉樹の種子を農業改良普及所が栽培、当地に植栽して「世界の森」として開設した。しかし、生育が悪く、衰退したため、各種施設を配置。コンセプトが不明瞭となっている。	元タゲツケイジュが植栽された場所を花の見所としてラベンダーの花園として整備。しかし気象が合わず早期に衰退。 平成25年度に改めて夏の花を中心とした「夏の花八景」として再整備 東の広場イベント時に休息場所として多くの人が利用。	設計当初からプラタナスの並木として整備される。 石畳と紅葉したプラタナスの景観が来園者に好評である。	計画当初から東口と太陽の塔をつなぐ桜並木として整備される。 万博公園の桜の通り抜けとして有名で、毎年新聞、雑誌に取り上げられるほど。	過剰利用による芝生の衰退 外来生物(植物)の侵入 更なる利活用ニーズの高まりと植栽保全とのバランス 水系を活用した遊び場の確保
緒元 (面積、主要品種・本数)	面白自転車(有料施設) やったねの木(大型遊具) ルピナスガーデン が配置。	約8,000 m ² 多彩な草花が咲く夏の花壇となっている。	プラタナス 約120本	ソメイヨシノ 約200本	・来訪者が寝転がれる管理良好な芝生地 ・草原性の生物が住める樹林地脇の草地 ・遊び場としての親水空間整備された芝生の中の流れ
管理内容	除草	草花管理一式	除草、薬剤散布	剪定、施肥、除草 がん種病対策	・芝生管理作業において芝生の更正工種を増加し、良好な芝生空間を創出 ・保全的性格の強い水鳥の池周囲の散開林を草原性の環境に改修しエコトーンを創出 ・もみじ川及びどんぐり池からの水系に親水性を持たせ、子供たちが安全に遊べる水辺環境を創出
課題	針葉樹のTRR比が悪く、土壌が劣悪なため、傾いている針葉樹が多い。 北風がきつい台風時に倒木の恐れ大。	周囲の樹林地が園内を圧迫しているため、下枝除去、間伐を行い明るい林床を持つ樹林地に囲まれた花壇地として環境改善中	プラタナスの大径化。根系が浅く、倒壊の可能性がある。かつて頂部を剪定し安定化を図ったが、景観の悪化を理由とした苦情が多発した経緯がある。	劣悪な土壌のため、根系が異常でがん種病の発生が良くみられる。 植栽後40年が経過し、樹木の勢いが落ちつつある。	
行事	特になし	特になし		4月「桜まつり」「陶器市」 8月・12月「イルミネイト」	広場の専用使用により各種団体がイベントを実施
目標像	夏の花八景への導入部としての林床に彩ある樹林地	広がりある芝生地とボーダーの草花による明るい夏の庭	美しいプラタナスの並木道	万博公園を代表とする桜の通り抜け	
対応手段	針葉樹林の風倒対策 林床草花の植栽・育成	周辺の樹林地を間伐し、明るい林床へと変換。庭園全体の環境改善を継続	ワイヤー支柱によるプラタナスの安定化	土壌改良、外科治療による桜の樹勢回復。	・特定外来生物、侵入雑草の防除 ・環境改善の実施計画を策定 ・踏圧障害の改善 ・踏圧に耐える芝生土壌環境に改善 ・水鳥の池沿いにおいて、在来種主体の草地環境整備の実施 ・親水施設・水生生物生息環境の整備 ・子供が遊べる親水性機能と水生動物の生息地をもみじ川とどんぐり池からの水系に創出
提供するプログラム	ルピナス等春の花の鑑賞 写真撮影	花の鑑賞 写真撮影	写真撮影 紅葉の鑑賞	四季イベント	大規模イベント(各種団体による)

外周道路沿いの緑地の運営方針（案）



万博記念公園 現況平面図



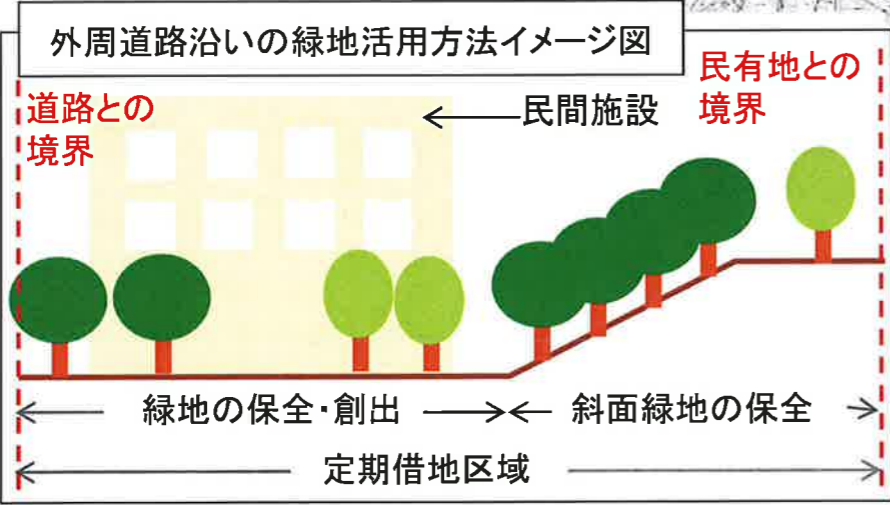
目標像	<ul style="list-style-type: none"> ・斜面緑地と施設緑地が一体化した、高い緑被率・緑視率の外周緑地帯の形成 ・良好な植栽管理による、美しい緑地の形成
対応手段	<ul style="list-style-type: none"> ・斜面緑地の保全基準、平地は施設緑化基準の設定 ・NPO管理地の現状の良好な管理状態の維持 ・スポーツ施設等での緑化区域の設定、各施設管理運営者による一元管理



斜面緑地

※記念競技場は地役権が設定されている。

- 緑地(活用検討地)
- 既活用地
- 斜面緑地
- NPO管理地
- 主要施設



NPO管理地での活動の様子

園内移動手段の確保（案）

万博記念公園 現況平面図

○観光バスの
乗り入れ経路の検討

○アプローチの改善を検討
阪大病院前駅からのアクセス性確保

○園内移動手段の検討
（人力車など）

○太陽の塔から日本庭園への
歩行者動線を改修

○万博記念公園駅から
園内への移動手段の検討
（電動マイクロバスなど）

← - - - → 新たに設置を検討する移動手段

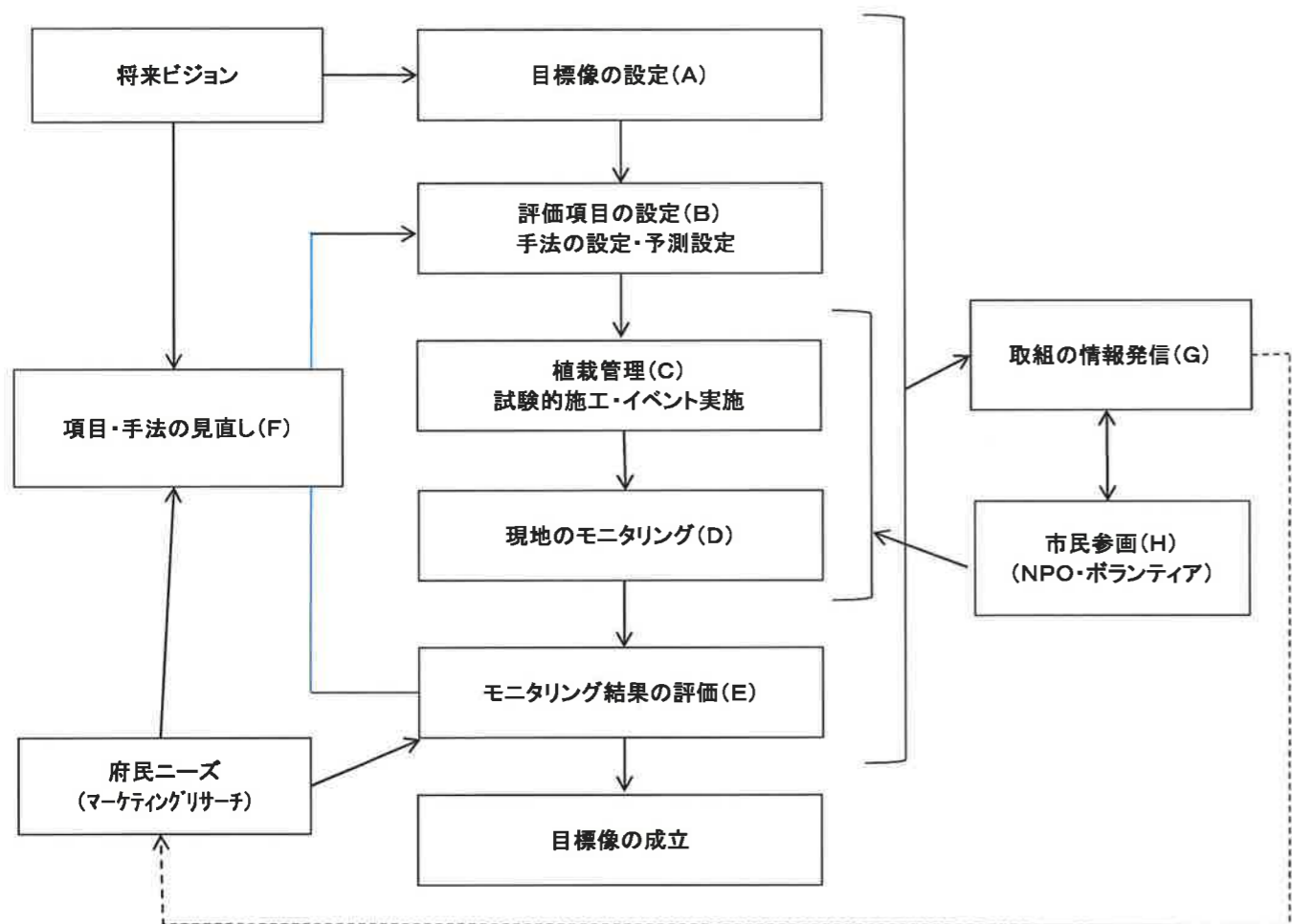
← - - - - - → 強化を図る歩行者動線

○各駐車場から園内への
移動手段の検討



緑地管理における順応的管理手法の骨格

緑地管理の事業推進フロー



目標像の設定(A)

- 万博記念公園の骨格となる緑の設定
 - ・密生林: 照葉樹林主体の樹林、常緑・落葉混交林、鳥類保護林
 - ・疎性林: 落葉主体の樹林
 - ・散開林: 高木がまばらに生える芝生地
 - ・日本庭園
- 密生林・疎性林・散開林で目標とされる植物相・動物相
- 目標とされる植物相・動物相が成立する時期(長期・中期で設定)
- 緑の理想的な活用内容・景観

関係する計画等

将来ビジョン、植栽AM計画、自立した森再生計画、日本庭園管理マニュアル...

植栽管理(C)

試験的施工・イベント実施

- 目標像に向けた、現地での植栽管理。
 - 目標像達成に向けた、市民参画による各種取組
 - 学習館、NPO、ボランティアによる緑の利活用
- 設定された項目達成を最も効率的におこなう手法を確定し、実施する。
 手法: 業者委託、NPO委託、ボランティア協働、直営
 発注: プロポーザル、総合評価、一般競争、随意契約、共同研究 等

モニタリング結果の評価(E)

- モニタリング結果を元に、実施している植栽管理業務、試験的施工、イベントの効果を確認する。
 - 来園者アンケート等により、府民ニーズ、来園者満足度を確認する。
- ※職員のモニタリング解析スキルの向上、外部発注による取りまとめ必要

取組の情報発信(G)

万博記念公園における緑再生、生物多様性の保全の取組を広く社会に発信し、社会の理解を得ると同時に、その利活用について、情報発信を行い、緑地管理の必要性を社会に理解させ、同時にさらなる利活用の可能性について周知することで利用の増大を図る。

情報発信ツール

学習館、公園だより(旧森発見部分)、啓発イベント、委員会報告書
 モニタリング結果の公表、マスコミ媒体による発信、HP

※さらなる効果的な情報発信の枠組みを構築する必要あり。

評価項目の設定(B)

手法の設定・予測

- 密生林・疎性林・散開林で目標とされる植物相・動物相の代表種の設定
- 成立までの途中評価のための代表種の設定
- 評価項目
 - ①植物相
 - ②動物相
 - ③水系
 - ④景観
 - ⑤利活用
 - ⑥資源循環(低炭素)

現地のモニタリング(D)

- 植栽管理および試験的施工により、どのように園内の環境が変化したかを現地調査する。
- 園内の緑の利活用についての利用者満足度を調査する。
- 調査種類
 - 植物相: 自立した森毎木調査、植物相調査
 - 動物相: 野生動物調査、鳥類調査
 - 水系: 水質調査、水生生物調査
 - 利活用: イベント満足度調査、公園来園者アンケート、府民参画満足度調査、学習館イベントアンケート
- ※現状の各モニタリング作業を目標像、評価項目に合わせた手法と内容にまとめる必要あり。
- ※モニタリングは特殊スキルが必要なため、外部発注が必要

項目・手法の見直し(F)

- モニタリング結果等より、効果が薄い若しくは予測外の結果を生じている管理手法については、その改廃も含めた検討を行い、目標達成への推進を図る。
 - 外形的公平性を確保するため、委員会形式による専門家の意見を取り入れる。
- ※委員会の新規設置、来園者アンケートの改造が必要。
 ※見直しによる各種計画の修正について、外部発注必要。

市民参画(H)

- 将来ビジョンの目指すべき方向性の「市民参画型公園」の実現には、NPOやボランティア団体、その他公園外で活動する市民団体との連携や共同が不可欠である。
- また、市民参画活動が活発になるにつれ、万博記念公園の必要性について社会的認知が向上する。
- これらから、出来る限り市民参画による緑地管理を推進する。
- また、外部研究機関との共同研究によるモニタリングも重要である。

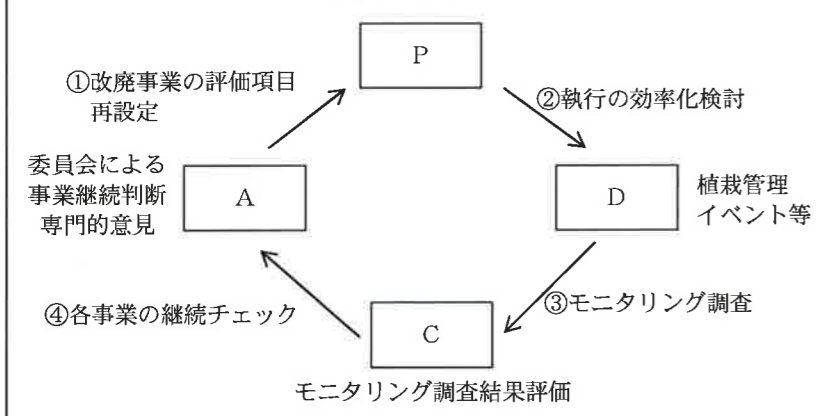
市民参画が可能な事業

- 緑地管理の一部、足湯の運営、花壇管理、モニタリング調査の一部、学習館イベントの協力・参加、啓発イベント、環境教育、共同研究

緑地管理におけるPDCAサイクルの概要

上記のフロー図は、順応的管理手法に重きを置いて記載したフロー図であるが、PDCAサイクルに重きを置いて記載すると下図のようになる。
 大まかに、「目標・手法の設定 ⇒ 効果的な事業執行 ⇒ モニタリングによる事業結果 ⇒ 第三者による事業評価 ⇒ 評価項目・手法の再設定」となる。

PDCAサイクルは一年間で1サイクルとする。
 目標設定に関する計画は、5年を1サイクルとする。
 手法の(再)設定



- ①改廃事業の評価項目再設定
公効果が無いと判断された事業について、新たに評価項目を設定し、事業内容を検討。
- ②執行の効率化
再設定された項目を実現する手法について、もっと効果的な執行手法を検討。
- ③モニタリング調査
動植物調査・利用満足度調査等の手法で執行状況を検証。
- ④各事業の継続チェック
事業継続の判断基準を、進捗状況や利用満足度結果からを設定し検証。

万博記念公園の活性化に向けた将来ビジョンについて（万博記念公園運営審議会中間報告） 概要版

■審議の経緯

- 平成 26 年 2 月 20 日 第 1 回審議会 日本万国博覧会記念公園の活性化に向けた将来ビジョン(施設整備及び運営)について諮問
- 平成 26 年 7 月 14 日 第 2 回審議会
- 平成 26 年 8 月 26 日 第 3 回審議会(中間報告)〈他に魅力創出部会及び緑整備部会を各 2 回開催〉

今後の予定

- H27 年 1 月 審議会答申 将来ビジョン(案)
- H27 年 2 月 パブリックコメント
- H27 年 3 月 将来ビジョン策定

■万博記念公園の現状と課題

○森の育成

【これまでの目標】自立した森「都市化に対抗しても生き生きとしている森、多様な動植物と共存している森を育成」
 【課題】「樹種の少ない過密した森、林床が暗く、昆虫や鳥など生き物の種類が少ない、若い木が育っていない」

○施設の状況

【老朽化対応】博覧会当時のインフラや施設を改修して活用、老朽化に対処するため、大規模な補修・改修が必要。
 【大規模災害時の活用】広域防災拠点、後方支援活動拠点、広域避難地に指定、災害時に適切に活用。

○利用状況

【利用日】平日の稼働率が低い。【利用圏域】利用者の大半は万博近郊居住者。外国人観光客は少ない。
 【来園の目的】「イベント等の見学・参加」が増加。「花の観賞」「樹木の観賞」を目的とする利用者も多い。
 【ボランティア】園内で植物管理や生物調査をNPOが実施。庭園ガイドや自然観察などのボランティア団体が活動。

○公園運営

【収支状況】新たな財政負担のない形で運営する。一層の魅力向上に向け、収入の確保に努める必要。
 【管理手法】公園事務所を設置し直営で運営。(施設毎に管理委託、土地貸付により民間企業等が設置した施設も存在)

■社会情勢の変化

- 地球環境の保全、循環型社会の構築(生物多様性、地球温暖化、資源循環)
- 訪日外国人の増加(来阪外客数の増、府としての観光立国の推進)

- 少子高齢化(子どもの健全育成の場、高齢者の生きがい・健康づくりの場)
- 共助社会(NPO・ボランティア)
- ライフスタイルの多様化(子ども、高齢者、障がい者が文化・スポーツを楽しむ)

■これからの万博記念公園

基本理念 人類の進歩と調和

・大阪万博の跡地を「緑に包まれた文化公園」にするという理念の下、「人類の進歩と調和」を具現化するべく、万博機構は森林の育成、文化の発信に取り組んできた。
 ・「人類の進歩と調和」というテーマは普遍的テーマであり、大阪府としても、万博記念公園の基本理念としてあらためて設定する。

目標像

基本方針

具体的な取組み例

- ◆地球環境保全・再生に貢献する公園
(生物多様性、地球温暖化防止、資源循環)
- ◆緑の中で人々が憩い活動し美に感動する公園
(人と自然・芸術の触れ合い)
- ◆国内外から多くの人々が訪れる公園
(観光集客、都市魅力の創出、万博遺産の継承)
- ◆文化と美を体験・創造し発信する公園
(日本文化、芸術、民族学)
- ◆健康づくりを支援する公園
(スポーツ、レクリエーション)
- ◆全ての人が安心して快適に利用できる公園
(高齢者、障がい者、子ども、防災拠点)

- 【広報】
 - IT の活用
 - 大阪万博の遺産を紹介するガイドツアー
 - 国内外に向けた広報の強化
 - 園内施設のネーミング募集等
- 【事業者誘致】
 - 公園の質の維持向上、魅力づくりと収入の確保のために外周道路沿いの土地等を民間参加により、さらに活用する。
- 【運営手法】
 - 民間活力を取り入れた運営体制の検討
 - 利用者サービスの向上による公園の魅力形成
 - クラウドファンディング等による参加型公園づくり

■目標年次 平成 32 年(2020 年)を節目とし、平成 42 年(2030 年)とする。長期的に行うべき森の育成は平成 82 年(2070 年)を目標年次とする。

目標とする公園像における機能強化策(案)①～②

人間性を取り戻し生命力をチャージする公園としての機能強化策(案)

①「いのち」を育む森

F

自然文化園エリア
生命力が高まるナチュラルでヘルシーなライフスタイルの発信スポットとしての環境の整備
 [概要]
 ○自然の中でトレーニングができるようジョギングコースを整備
 ○森の中で健康的な食事が楽しめるナチュラル&オーガニックフェーヤレストランを誘致
 ○誘致する飲食に対してのガイドラインとして できるだけ環境に負荷をかけないよう 再生可能エネルギーへの取り組みやゴミの再利用にも積極的に取り組み ゼロエミッションの実践を指示し社会実験機能も担う
 ○ベンチ、ゴミ箱、遊具や休憩所など設置公園内の設備もエシカル(倫理観の高い)な企業の広告媒体として開発し協賛を募る

②公園の顔となるシンボルゾーン

C

宿泊者限定文化体験プログラム付癒され生命力を養う隠れ家的高级リゾート旅館誘致
 [概要]
 ○不便な立地を逆手にとった隠れ家的高级リゾート旅館を誘致
 ○日本庭園茶室での貸切懐石・太陽の塔からの日の出ウォッチングなど公園の施設と連携した宿泊者限定プログラムを用意
 ○宿泊者にしか体験できない様々な限定プログラムによってステータス層を醸成しエリアのブランド力を強化する
 ○社会的ステータスの高い財力のある海外からの富裕層をターゲット観光収入を確保するとともに公園に対しての憧憬感を高める
 ○伊丹空港・新大阪駅などの主要ターミナルからホテルまでの送迎サービス体制も検討

B

太陽の塔・お祭り広場(シンボルゾーン)
太陽の塔を現代の聖地とした名刹シンボルゾーンの整備
 [概要]
 ○エントランスから太陽の塔までの参道(動線)の整備
 ○太陽の塔を中心とした観光祭りの立ち上げ
 ○桜祭り・紅葉祭り東南アジアにはない四季を感じるイベントをしっかりと海外に向け広報発信していく
 ○太陽の塔を偶像化したオリジナルグッズ開発
 ○太陽の塔ベストフォトスポットマップの作成
 ○世界に向けたTARO OKAMOTOブームの仕掛け

D

大阪日本民芸館・公園東エリア
日本の生活様式を輸出するMINGEIの聖地としての機能強化整備
 [概要]
 ○art of the people(民の工芸)として欧米で関心が高まる文化概念MINGEIの聖地としての機能を強化
 ○民芸協会との協議のもとミュージアムショップの拡充公園西側の宿泊者の観光消費を促す
 ○さらに東側ゾーンには現代のMINGEIとも親和性の高いライフスタイルショップのアンテナショップを誘致を検討
 ○日本の生活技術を結集した万博公園店オリジナルの品揃えで希少性をつくり話題性と集客へとつなげる
 ○また「人々の暮らしの中で生きてこそその民芸」の実践のための食イベント住イベントなどの定期開催を行う

E

国立民族学博物館
MINPAKU x art/music/fashion文化のエネルギーが響き合う民博コレクションの創設
 [概要]
 ○民博の持つ知見とアート・音楽・ファッション分野で世界的に著名な一流アーティスト達とのコラボレーションのプロジェクト「民博コレクション」を立ち上げる
 ○コラボするアーティストやファッション界から現代ジャパニーズテクノポップまで
 ○かつての民芸運動が様々なクリエイターのクリエイションの源泉となり近代のジャポニズムが文化輸出されていったように大阪発文化産業創出の装置として機能するプロジェクトを標榜する
 ○発表作品は東駅周辺のライフスタイルショップで販売などを検討



目標とする公園像における機能強化策(案)③～⑥

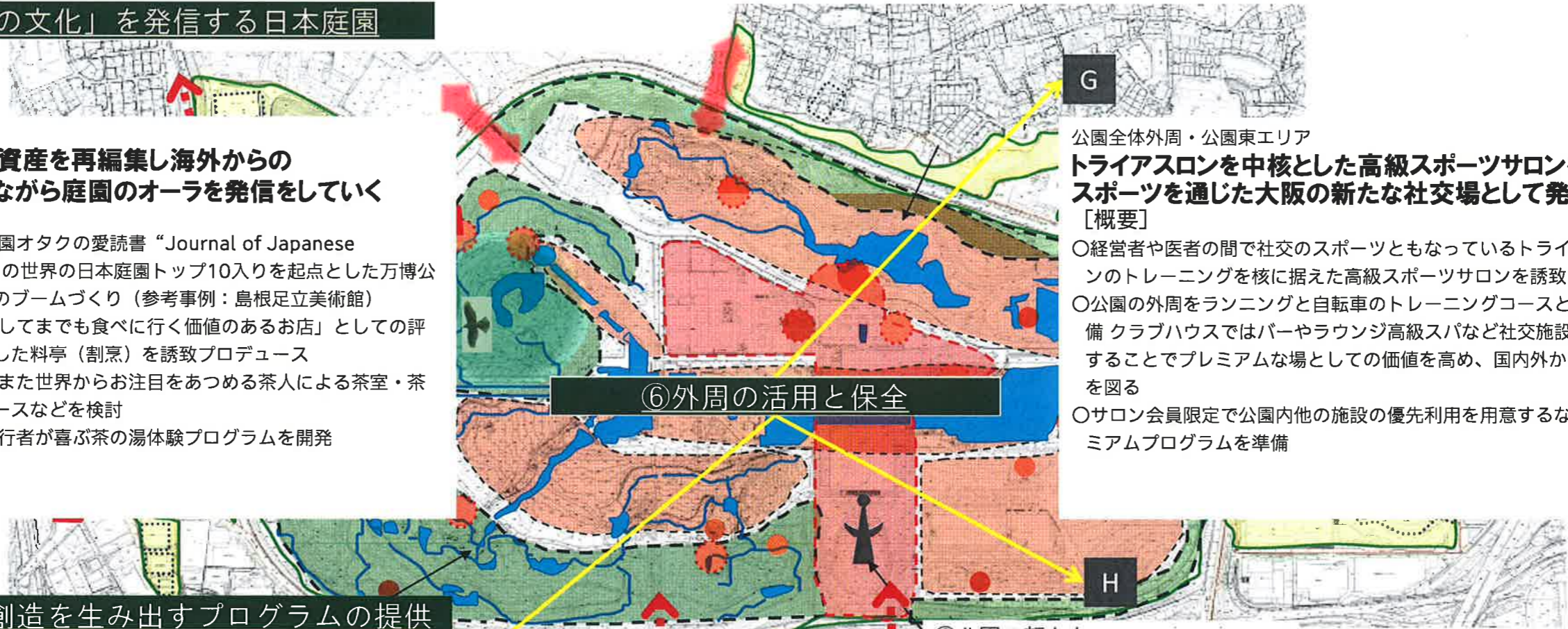
人間性を取り戻し生命力をチャージする公園としての機能強化策(案)

③「和の文化」を発信する日本庭園

A

日本庭園
日本庭園の資産を再編集し海外からの評価を高めながら庭園のオーラを発信していく

- [概要]
- 世界中日本庭園オタクの愛読書“Journal of Japanese Gardening”の世界の日本庭園トップ10入りを起点とした万博公園の日本庭園のブームづくり(参考事例:島根足立美術館)
 - 「敢えて遠出してまでも食べに行く価値のあるお店」としての評価獲得を目指した料亭(割烹)を誘致プロデュース
 - 海外を知り、また世界からお注目をあつめる茶人による茶室・茶事のプロデュースなどを検討
 - 海外からの旅行者が喜ぶ茶の湯体験プログラムを開発



G

公園全体外周・公園東エリア
**トライアスロンを中核とした高級スポーツサロンを誘致
 スポーツを通じた大阪の新たな社交場として発信**

- [概要]
- 経営者や医者の中で社交のスポーツともなっているトライアスロンのトレーニングを核に据えた高級スポーツサロンを誘致
 - 公園の外周をランニングと自転車のトレーニングコースとして整備
 クラブハウスではバーやラウンジ高級スパなど社交施設も完備することでプレミアムな場としての価値を高め、国内外からの集客を図る
 - サロン会員限定で公園内他の施設の優先利用を用意するなどプレミアムプログラムを準備

⑥外周の活用と保全

⑤交流と創造を生み出すプログラムの提供

J

府民NPO団体等の活動・交流拠点としての「万博公園パークスカウトハウス」の設立

- [概要]
- 自然観察学習館を活用し、府民団体の活動のサービスステーションとして整備
 - 各種府民団体の結成や団体間での交流を促したり、団体運営の相談に乗る人材を配置し、参加したい個人と受け入れ団体の仲介など各種サービスを提供できるサポート体制を整える
 - プログラムコーディネーターや公園インタープリター、通訳ボランティアガイドなどの人材を育成(参考事例:東京ガス 環境エネルギー館)
 - NPO団体とも連携し、食(生産から加工までを体験)、環境、緑地管理、自然科学など様々なテーマでのプログラムを開発し実施
 - 南側活性化事業内の英語村、海遊館等周辺施設との連携プログラムの受け入れ先としての機能
 - いずれはパークスカウトハウス自体が府民によって運営されていくことをめざす

I

駅前周辺エリア
**ナチュラルでヘルシーなライフスタイルを提案する
 スポーツ関連ブランドの旗艦店誘致**

- [概要]
- 環境意識の高いスポーツウェアブランドとして知られているアウトドアなどのフラッグシップ店を誘致を検討
 センスの高い公園としてのブランドカアップにつなげる
 - フラッグシップ店限定のグッズの販売や園内施設 フィールドを活用したキャンプ教室や自然教室ワークショップなどを行い実施公園内の賑わいづくりに繋げる
 - その他同様の理念を掲げる企業を誘致することでエリア全体のイメージの底上げとブランディングも行う

H

公園南エリア
**関西随一イケてるエクストリームスポーツの
 “聖地”としての機能を付加**

- [概要]
- 野球場やフットサル場などの既存施設と共存する形で、少ない設備投資で設置が可能なエクストリームスポーツのフィールドを整備し今まで公園を利用していなかった新たな層を呼び込む
 - 日本初のX-Games Japan開催地にするなど国際大会やイベント開催を視野に 整備ながらこのスポーツでの世界に通用するトップアスリートを育成し万博公園の知名度を世に知らしめエクストリームスポーツの聖地としての神話作りを行う
 - エクストリームスポーツに多額の協賛をしている企業のスポンサーを獲得などを検討

